

# 北辰會雜誌



第九十九號

1924

第四高等學校北辰會雜誌  
大正十三年三月三日印刷  
發行  
第九十九號

# 北辰會雜誌 第九十九號 目次

病める牝鶏	(小説)	内方新之丞	(二)
冬の日	(小説)	石川正三	(二一)
山を買ふ話	(小説)	窪川鶴次郎	(二九)
ある情話	(翻譯)	エナイ・ドストイエフスキイ	(三六)
きさらぎ抄	(俳句)	大野正	(四六)
三人集	(和歌)	西堀・能澤・宮川	(四八)
薄人明	(譯詩)	大澤衛	(五一)
デエメル短章その他	(譯詩)	中野重治	(五五)
山鳴り	(戯曲)	岡良一	(六〇)
石狩の兄弟	(戯曲)	坂田精一	(七八)

部報及編輯後記 ..... (一〇九)

表紙(銅版)  
挿繪(コロタイフ)

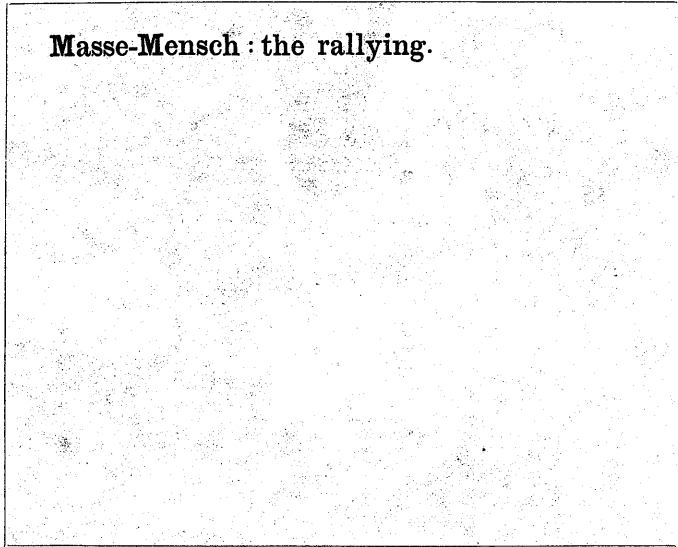
Muttergottesbild, Bauernmalerei.  
Pechstein: Das Rinderpoch.  
Masse-Mensch: the rallying.  
The cabinet of Dr. Caligari.

**Pechstein : Das Ruderboot.**

Reichstein : Das Rindvieh.



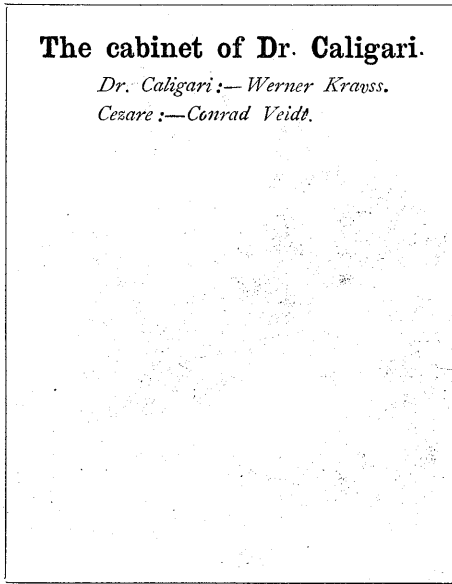
**Masse-Mensch : the rallying.**

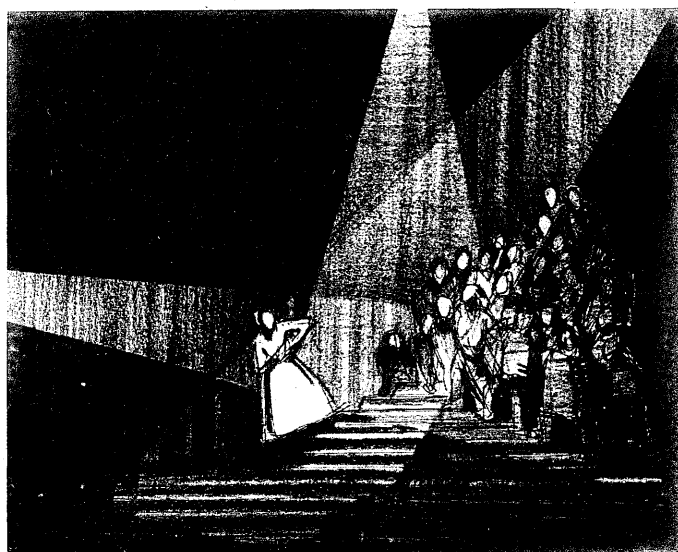


**The cabinet of Dr. Caligari.**

*Dr. Caligari :— Werner Krauss.*

*Cesare :— Conrad Veidt.*





Massachusetts: the following

The cabinet of Dr. Osherson  
Dr. Osherson—Harris, A. J.  
Harris, A. J.—Osherson, Dr.

magasin de la ténacité et

北 辰 會 雜 誌

第 九 十 九 號

1 9 2 4

# 病める牝鶏

内方新之丞

1

鼓腸の痛みで目の醒めた東平は、寝返りもできないぼんぼんの腹に両手をあてながら、ぐいと首をねぢむけて、床の間の枕時計を見た。六時を丁度半まではつてゐた。夜明の寒さが、秋の中ごろとはいへ、ひしひしと病態の彼をおそつてきた。そしてまた苦しうに首をもとの方にかへして黒塗の天井をじいつと見入つた。……五羽の牝鶏が、一羽の牡鶏をかこんで、つぶら目をしばたきながら冷たうに土の上にうづくまつてゐる姿が、映つてきた。そしてそこから少し離れた宿木ぐもりぎの上に、たゞ一羽眞白の牝鶏が、じいつと目をつぶつたまゝ、おし黙つてゐる淋しさうな姿が、やきつくやうに病態の彼の瞳に映じてきた。彼はほつと溜息をついた。と玄關の戸がころころと朗かな音をたゞて開いたやうだつた。併しその音が朗かであればあるだけ、彼の衰へきつた身体がしみじみ憐まれてきてならなかつた。

しばらくすると障子を静かにあけて、姪のお新が目玉の大きい顔をのぞかせた。東平はお新の愛嬌のある瞳を見ると、すぐお新の父である東助のことが思ひ浮んだ。

「お父さんはまだくる様子もないかな」

「まだ」と云つたきり、お新はそこらあたりにちらばつてゐる薬瓶や湯吞などを整頓しはじめにかゝ

つた。いつのまにかお新はの下で何か歌をうたつてゐた。東平はぢいつとお新のうひうひしい頬をながめた。あまり智さとしい方ではなかつたけれど、かうも大きくなつた姿を見ることは、今の彼にはひとしほ嬉しかつた。

東平には十年ほど前に死んだ妻にも、子供がなかつた。まだその頃は元氣で村のために奔走してゐたので、子供がなくてもさう淋しくはなかつた。けれど今の同じ村のお品を後妻に貰つてからも、子供はひとりも出来なかつた。追々年もとつてくるので彼は子供がほしくなつた。後繼をと思つて見たけれど、いゝものは見つからなかつた。丁度その頃臺灣で教師をつとめてゐた弟の東助が、分家の東作がせゝら笑つた如く、ちようど藁籠てんごの中からひね茄子なすびでもとり出すやうに十年もたゝないうちに十人も子供が出来て了つた。そしてあげく臺灣から女子ひとり養つてくれと言つてきた。東平は男の子がほしかつたけれど、どうたうその娘を養女とすることにきめた。それがお新で七つの時であつた。子供のない東平はお新を目の中に入れるほど可愛がつた。淋しい時は、いつもお新を抱いてねたほだつた。――そして臺灣の東助が、もう東平も身体が弱つてきたので商用かたがたはるばる見舞にくると此間言つてきた。それを東平は首を長くして待つてゐるのである。

お新は雨戸をあけに出ていつた。外には、黄色くなりかけた田圃が霽れあがりつゝある霽の下にぼうつどうちつゞいてゐた。霽が大きく揺れつゝ煙のやうに向ふの山の方に霽れあがつてゆく。その透きとほるやうな冷たしさが、またもや彼に淋しさを感じさせた。さうして「もう少したつとこゝの水田にも鳴がなく……」と獨言した。



そこへ東平の妻お品が二つ三つ咳をしながら鐵瓶をさげて入つてきた。垢抜いた瘦せがたの女である。

「お腹は」

「うん、あひかはらずだな——それはさうと東助はどうぢや。今日位くる模様か」

「どうですか」とお品は黙つてゐた。

「久し振りであふとなると氣がせく」と東平は小聲で言つた。がお品はその話にさはりたくないやうな顔をしてゐた。それが彼をまた不愉快にさせてきた。いつも氣もちよく合榘うつてくれないお品がうらめして堪らなかつた。村のため財産を殆なくして了つても、村の人たちから餘りよく言はれない、また胴慾な弟の東作をもつてゐる彼にとつては、お品かお新に慰さめて貰ふより他はなかつた。彼は元氣のときは決してそんな弱い心をもつてゐなかつた。今でこそ落ちぶれてゐるが以前は随分裕福だつた。彼の家をとりまいてゐる幾抱へもある櫟や櫟の樹を見ても分る。實際は彼は村のためにつくした。耕地整理や道路修繕や河川改修をして大水がついても心配がないやうにしたのも主に彼の力だつた。昔から隣村から莫大な金を出して用水をひいてゐたのを、斷然灌漑機械を村はなにすえつけて、しかも電氣で運轉したのも彼の力であつた。殆もう電燈の下で夕食が食べないと諦めてゐたのを、直ちに遠い山中から電線をひいたのも彼の力であつた。その彼が病氣になつても、最初は皆おきまりに一度づゝは見舞にきたけれど、あとにはほんたうに見舞つてくれるものは餘りゐなかつた。——こんな氣分にあるのにお品はいつも隔があるやうな物の言方をすると彼には思はれてならなかつた。それは無理もない、お品

は一變町に嫁入つてゐたが、夫が死んだため離縁して歸つてきた若い女だと思ふこともあつたが、最も大きなかくれた力は、子供の一人も出來るかも知れないと望んで結婚したのに、子供が出來たかもしらんと驚かしたこともさへもなかつた——そのことであるとは彼もしみじみ思つて見たこともあつた。彼が今でも鶏を飼つてゐるのは、お品と結婚してから三年目からのことであつた。それらの淋しみを、鶏を飼ふことによつて慰さめようと思つたのである。——ほんとに彼のやうに公のため骨折り働くものは、えて家庭的にうまくゆかないものである。

そのうち鐵瓶がちんちん沸きだしたので、お品は夫の薄團のすそをふかふかにどゝのへて出ていつた。あとに残つた彼は、その鐵瓶の湯氣をいままでとは、ちがつた心持で眺めてゐた。鐵瓶はけいきよく容赦なく白い淡い湯氣をはいてゆく。

東助が歸つてくるのを喜んでまつてゐる東平を齒がゆく思ひながら表の方に出てくると、五十に近い頑丈な分家の東作が、むしやくしやと手をもみながら「今日は氣分はどうぢやね」と言ひつゝ入つてきた。お品はびくつとした。——これまで東作は本家でありながら、東平の家へは餘りこなかつた、そして本家の田地を事につけてどらうとしてゐた。その東作が、東平が腹膜を患つて床につくやうになつてからは、一日おきにしつこく彼の家にやつてきて、あれやこれやと家の内狀に容喩したり指圖がましいことを言ふやうになつた。お品はつけねらつてゐる蛇のやうな、いやな感をうけてゐた。

東作はべつたりと横坐にあぐらをかくと、ゆつくりと腰から眞鍮の黃色ぼくなつた煙管をとり出して、

一吹すばすばと吸つた。そのさまを見て火をたいてゐるお新を眺めて、「お新、うまからうな」とにやにや笑つてから、臺所にゐたお品を「ちよつと」と言つてよび出した。彼は今まで一度もお品を「姉さん」とよんだことがなかつた。

東作はあらたまつて、お品に囁くやうにいつた。

「今日は外でもないんぢやがの。この間からくるくるつていつてゐた東助が、あの臺灣の東助が、ひよつこり昨晩家へきての」と「ひよつこり」と言ふとき、道化けたやうな顔付をした。「茲へすぐさま足を運ばにやならんのぢやがの。おらの家によると、何しろ遠ひ旅ぢやもので、疲が出てきて眠つて了つて……それです」

お品はいよいよきたなといふやうな氣がした。いゝ理窟をならべて尤ものことのやうにいふ東作の顔付が阿呆らしいてならなかつた。が彼女はじいつと我慢した。

「それなら今一緒においでになればいいのに」

「それも、それもさうさ——まだやすんでゐるので起すのもなんだと思つて」

「さうですか」

「この事は病氣の兄貴にも知らせるのも何だから黙つてゐておくれ——だがの話しはのこれからで」東作はぼつりぼつりと囁き出した。お品も何とか言つてやらうと思つたけれど、辛抱がだいいいちと思つた。

「話のは、それそれ今度弟が臺灣からはるばるきたのも、たゞのことぢやないんで。あれも子供が多いので、教師しても食つてゆかれないと言つて商賣をはぢめたんださうな。それがこの不景氣でござん

やられたといつての。金を少し工面してくれと言つてきての」

お品はよつぽこの時言つて了はうかと思つたが、黙つてゐた。かの女は懷に手を入れて、左の乳房をじつとおさへつけてゐた。

「それは出来ないでせう」

「出来ないことがあるもんけえ。話しは至つて簡單だがの」

「お父さんが、病氣でないならともかく……」

「いやいや。兄貴はもう長くない。さうお醫者さまも言つてゐなすつた。それで兄貴位はさうでもないんだよ。お前はんさへ、うんと言つて貰へればいいので。兄貴がなくなれば、まあお前はんが——の。おらも東助もせい一ぱい面倒を見てあげるぜ」

「私ひとりなら、そんなこといやす。出来ません」とお品はきつぱり言ひはなつた。

「あとにはお新とお前はんだだけ。それにさ、東助も同じ戸籍に入つてゐることやから。それにお前はんも二番目だし」と彼女を赤い舌でなめつくすやうにお品の顔を眺めた。

お品はぶるぶるふるへた。つと立ち上つた。後妻であること、女であること、本當の子供がないこと、そんなことがぐるぐる頭を横ぎつていつた。

「えゝ分つてゐます。やめてください。縁起でもない」さうしてこの時こそ彼女は胸にひめてゐることを言つて了はうかと思つた。それでもこらへてゐた。

「おらはもう歸らう。だが東助が歸つてきたことは、暫くいはないでおくれ」と念をおして出ていつた。

お品は東作の出てゆく姿を眺めながら、どうしても兄弟が共謀になつてゐるのだと思はないわけにはゆかなかつた。かの女が東作の顔にぶつつけてやりたかつた話は、かうであつた。——一週間程前にかの女は偶然お新の机の上にある手紙を読んだ。それは彼女の父東助からきたもので、二週間程するとお前のところへゆく、そして父が死んだら、後始末をしてお前をつれて歸るから待つておれといふ文面であつた。それがいよいよ實現されてしようとしてゐるのである。

## 4

さうなれば、まづひどい目にあふのはお品だつた。もうお品のゐる家はなくなつて了ふわけであるから。しかし彼女はだいいちに大事であつたのは、夫の東平であつた。夫が早く直ることを只管祈つてゐた。東平さへ直りさへすればと思つた。が東平がまだ息のあるうちから、もう死ぬものと思つて、自分によつさきに内諾を得にお品を欺きにきた、東作らのやり方が氣にくはなかつた。そしてあの強慾な東作はまだとして、自分と割合に親しみのある東助までがどういふ心持で一緒に、出張つてくるのか分らなかつた。さうして東助といふ男のことを思ひ浮べて見た。

昔といつても、もう廿年程前のことであつた。その頃お品の家は東平の家の近くにあつた。東助が中學の三年位であつて、お品は十二の頃であつた。その東助がお品の親類である金平の娘のお澄にかなり戀をしてゐた。ある日お品が家の前で日向ぼつこをしてゐると、東助がやつてきて「お品はん、ちよつと用事があるから、家裏まできておくれ」と言つた。お品はまだ子供だつた。こいといふからつていつた。東助はびつたり裏の土壁に身をよせて囁いた。「あの——あの、氣の毒やが、お品はん知

つてゐるやろ。あの金平さんこのお澄はん。あの子にだいいの用事があるので——さうつと手紙をひつとことづけておくれよ。いゝもんをあげるから。渡したら返事をもらつてくるんだせ。わかつたか。わかつたか。さうつとだよ」と念をおして、お品のふところに生菓子をねちこむやいなや、一散に逃げていつた。……その習日お品が窓の下で本を讀んでゐると、障子が破れて、ぼとりと手紙が落つてきた。その手紙の表には「お澄殿」と蚯蚓みたいな字でかいてあつた。お品はこれだなど思つて、早速お澄にさうと手渡した。お澄ははじめ怪訝な顔をしてゐたがお品から「東助はんから」と聞くと、眞赤な顔をして、うばひさるやうにして懷にねちこんで了つた。さうして一月程お品は何もしらずに戀の中立をしてゐた。がある時流元で水をくんでゐると、東助がはづかしさうに窓から手紙を放つていつた。お品は濡れると思つてあはて、取りにゆかうとした時、棚の角にぶつかつて、大きな皿を石疊の上に落して了つた。その音をきゝつけて、母がこんできて、まだ拾つてなかつた手紙をとりあげて、不思議さうに「お澄殿 東助より」と讀みあげた。お品は氣まづくて仕様がなかつた。母は非常に怒つた。父が「馬鹿、馬鹿」と怒鳴つた。そして母がお澄の家へ知らせたので、一悶着の後、このことはおしまひになつて了つた。そのことはすんだだけれどお品が年頃になるとめつきり女振をあげてきた。その頃は東助も中學を出てぶらぶらしてゐた。そのうちに今度は東助はお品にへんな手紙を送つてきたことがあつた。もうその頃はお品にも、それ相當に智慧がついてゐたし、東助の評判も餘りよくなかつたので、彼女は放つておいて知らん顔をしてゐた。町へ嫁入するときも、東助がそのことをまだ根にもつてゐることを幽かに人から聞いたことがあつた。——そのお品が彼の兄の東平に貰はれたのである。さうしてその東助が十何年ぶりで遙々歸つてくるといふのであつた。

鶯はすつかりはれ上つて、窓からは朝日が金色の線をなしてさし込んできた。もうそろそろ百姓が仕事に出るのだらう、がやがやいふ聲が横手の方から聞えてきた。

## 5

お品が出てゆくと、東平はばんばんに膨れ上つた身体を起して、便所に立つた。彼はもう醫者から身体を起すことを禁じられてゐたけれど、いやだと言つて起きては用をたした。壁に沿ふて戸に沿ふて重しさうに歩いてゆく彼の姿はむしろ滑稽にさへ見えた。

彼は用たしてから硝子戸の前にたつて、しばらく横にある鶏屋こやをのぞいてみた。案の定、一羽の白い牝鶏だけは、隅の宿木とまりぎの上に、ちいつと目をつぶつて動かうともしなかつた。お前はなぜ獨りぼつちで離れてゐるのか。どうして餌をひろはないのか。どうしてお前たちは、そんなに憎みあふのか。もつと仲よくしてくれ、とさう彼は心の中で呟いてみた。

東平の鶏を大事にし世話することつたらなかつた。毎朝早く起きてせつせと世話をやいてゐた。そして卵を生んでも、これまで一つも食つたことはなかつた。その中に孵るべきはすの雛の魂が宿つてゐると思ふと、彼にはひとしほ残酷に思はれたのである。が今年生れた雛は、その一羽だけが、どうしても大きくなつてから、同じく生れた鶏たちと、一緒に餌をあさつたり、一緒にないたり、一緒に遊んだりしたことがなかつたのである。殊に牡鶏はいつもその一羽の牝鶏をにくんでゐた。餌をひらひに來たり、目にままつたりすると、その牡鶏は紅い鶏冠をふりたて、とびついたり追つかけてたりした。その様子の恐ろしさ、懸命さといつたらなかつた。その牝鶏の恐怖といつたらなかつた。彼はどうかしようと思

つた。そして元氣のあつた時は、いつも彼は特別の餌をもつていつてやつた。がそのうち病氣になつてくるどそのまゝになつて了つた。がその獨りぼつちの牝鶏はどの牝鶏よりも第一番先に大きい卵を生みおとした。彼はその大きな卵をながめたときほど、床のなかでしみじみ考へさせられ淋しがらせられたことはなかつた。彼はもうたまらなくなつて納屋の方にあつた鳥屋とやを彼のゐる室近の庭に移したのである。そして自分の病氣がながびけばながびく程、その牝鶏も世話がゆきとどかなくて衰へに衰へてきたのである。

鶯は全くはれて朝日が強くさしてきて、鶏屋の牝鶏はじはりと重い臉をあげたが、またそのまゝどちて了つた。そして慄えてゐるやうに軽く動いた。日光が線すぢをなしてぼつと鶏の白い柔い羽の上を入り亂れてゐた。

彼が床に歸つて横になるとまもなく、表の方で痾高い言争ふやうな聲がきこえた。彼の神経はいらだつてきた。

## 6

暫くしてお品が重湯などをもつて心持蒼褪めた顔をして入つてきた。東平はまつてゐたかのやうに險しい目付をしてお品の顔を眺めた。お品はびくつとして、ちよつと闕に立ちどまつた程だつた。また無理をいふのぢやないだらうかと思つた。

お品は彼のそばに坐つた。ちよつとの間沈黙がおひかぶさつた。

「お品」と東平はもどかしさうに言つた。お品はちよつとには返事が出來なかつた。それが病んでゐ

る東平の神経をぐいぐいまげていった。彼は再び「お品」とよびかけた。お品が心持慄聲で「はこ」と答へたので、彼は跋の悪さうな顔をして聲を小さくした。

「誰か来たやうぢやないか。東助が来たのか」

「いゝえ」

「それ見ろ。なにか言ひ争ひをしたんぢやないかな」

「いゝえ」

「いつたい誰が来たのかい」

お品はごうしyouかと思つた。分家の弟がきたと言へば、なせだと言ひかへされる。とひかへされなくても病氣を見にもこないと思つて夫の氣をそこねる。東助が来たと言へば疑惑を増すにきまつてゐる。東助の手紙のことなど言へば尙更彼の病を重くする。……そう思つてゐる間に「たれた」といはれたので、

「新家のです」と言つて了つた。

「そうか」と案外落着いて應じてくれたので、彼女は氣が抜けたやうになつた。東平は、お品の顔を見て、「もういゝ」と言つた。夫は淋しさうな顔をしてゐた。彼女はたち上つて出てゆくとき急に臉が熱くなつてきた。それをちらと見た夫は、すぐわきをむいて了つた。さうして縁側へ出ると彼女の目からは、大きな涙がぼろりとこぼれ落ちた。

その日も暮れかゝらうとする頃、村の醫者が東平を診にきた。ひとわたり診察してから醫者はおし黙つた。お品がそばから「先生どうでせうか」とたづねると、醫者は「いゝえたいして變つたこともありません」と言つて出ていった。お新はすぐその後について藥をどりに行つた。

東平はお新をよんで鳥屋の戸をしめさした。電氣はまだこなかつた。火鉢の火だけが眞赤におこつて、あたりをぼうつと美しく照らしてゐた。彼はぼんやり暗黒な空間を見つめてゐた。お新が入つてきた。沈黙がしみわたつてゐた。

「お新」と東平はいつた。かうよんだもののどりたてゝいふこともなかつた。今朝のことが聞いて見たかつたけれど、子供のお新にと思つて口を噤んだ。お新はぼんやり火鉢に手をかざしてゐた。炭火に照らされた顔が美しく映えた。東平はぢつとこの静寂の中にお新とゝに浸つてゐたかつた。が丁度足がだるくなつたやうな心持がしたのでお新をよんだ。

「お新や。お父さんの足をもんでくれんか」

「はい」と言つてお新は彼の足をさすり初めた。東平は柔い手でさすられると、ほんとうに自分の足の腫れ上つたことが著しく感ぜられた。そしてこの足で、草鞋ばきであちこち奔走したのだと思ふと、自分ながらみじめな氣がした。

電氣を村に引くときだつた。高の澤山もつてゐるものは、もし電氣をひくとなると、多額の金と電柱を寄附しなければならなかつたので、割合に反對するものが多かつた。毎月金を出すのだから、石油よりは不經濟だと言つた。彼はまつ先にその交渉人になつた。その交渉にゆくときは、寒い雨がしとしと降つてゐた。その道には高い坂があつた。もうこの坂さへ越えれば、會社にゆけるところだつた。突然後の方から人聲がして、反對の人々が追つかけてきて、やめてく

れと言ひ出した。彼らは口論して、夜になつて了つた。そしてどうたう東平らは勝つた。——そんなことを思ひ出して、彼は心のうちで力——と叫ばないではゐられなかつた。力んだせいか、お新が「お父さん。静かにしてゐて」と言つたので我にかへつた。

そしてゐる間に、玄關の戸ががらがらつとあいて、數人の人が入り込んできたやうな聲がしてきた。

「誰もゐるか。誰もゐんのか」と呼んでゐるのが東作の聲だつた。

「お新」東平はよんだ。「いつて見ろ」

數秒間がすぎた。お新にともなはれて入つてきたのが、東作と臺灣の東助だつた。

暗くてわからなかつたが、「兄さん、どうですか。」と言つたまがうかたなき東助の聲をきいて、東平はうれしくなつて、

「お、よく來てくれた。よくきてくれた」と大きな聲を出していつた。彼は非常に嬉しかつたのである。おきまりの挨拶などがすむと、また沈黙がおそつてきた。東平は言ひたいことは山ほどあつたけれど、ちよつと出てこなかつた。彼は久しぶりで炭火に幽かに見える、二人の弟の顔を眺めた。二人は少しも似てゐなかつた。東助は彼には馬鹿に若く見えた。小供の十人なんて言へば人が笑ふほどだつた。東助のすふ巻煙草の口が時々ぼうと赤くなつた。そして東平が「いつ來たのだ」と言はうとした時、電燈がぼつともつた。三人がお互に顔を見合せて、淋しく苦笑した。

「いつ來たのか」

「只今です」と東助はかるく應じた。

「さうか。それでは随分つかれてゐるだらう。お品が……」と言ひかけた時、東助が目のみはつたの

を、東平は見のがさなかつた。「お品もいまに歸つてくるから、まあゆつくり休んでくれ」といつた。その時東作が初めて口をきつた。

「外でもないがの。今もくる道で東助がはなしたことだかの。東助がの、臺灣で商賣で損をこいて了つたんだと……それで少し金が工面出來ないかといふのやけれど」東平はちよつと驚いて目を見はつた。東作はつづけた。「金といつても、大したはぎでもないが、まあ五千兩位だと言ふので。どうかの」

東平は黒塗の天井を見つめた。とごろごろと子供の十人もかゝへてゐる東助の姿が、ありありと想像された。そして東助の戸籍が自分らとひとつになつてゐること、二度も十分仕度して養子にやつたことはあるけれど、離縁してからは大した分付もしなかつたことを考へた。しかし身体が丈夫であつたら、それ位の金は工面出來ないこともなかつたが、病める身としてはどうにも仕様がなかつた。

「わしには出來さうもないが、お前ひとつ工面してくれたらどうぢや」と東作をじろりと眺めた。東作はくすぐつたい顔をしてゐた。

「おらに出來たら、拵へても見ようけど、何しろこの不景氣ぢや、あれやこれやとの」

「でも今のわしにはとても出來さうもない」彼はさういふより外はなかつた。いろいろこれまで他人の世話をやいた彼が、今の身にとつては多額の金ではあるが、どうにもこの話を聽いてやることが出來ないのが齒がゆく思つた。それに東助はお新の父である。

「そんなら、かうしたらどうだね。おらの方で金を工面して見るから、その抵當として家の田地を入れて見たら」

「なに」と東平は叫んだ。またあの手で背<sup>な</sup>めにきたのだなと思つた。もうその手は喰はないぞと思つた。しかし彼は、この場合、久しぶりであつた弟の前で大きな聲はたてまいと誓つた。「まあ、そんな話はおどにしてくれたらどうだね。くるなりだからな——」彼は強ひて笑顔をつくつて見た。がなにかしらもの足りなくて胸が波うつてきたので、黙つて了つた兄弟から目をはなして、側に坐つてゐるお新のしよんぼりした顔をながめた。弟の東作は和いだ東平の聲をきいて、またしつこく喋り立てた。

「話だけでさあ」

「話だけでもいやだ」

「話だけでもきめてください。おらも東助も安心することだから」

「いやだから、あちらへいつてくれ」

「でも——もしものことがあつたら——」と東作は東助と顔を合せて東平の顔をちつと見つめた。東平は起きあがらうとした。彼の手はわなわなと痙攣した。そして兄弟を睨みつけた。

「いけといつてもわからんか」

8

その時お品が、黄色くかはつた薬瓶をさげてかへつてきた。お品は東助が來てゐたので、ちよつとためらつた風であつた、東平はお品の顔を助けを乞ふやうな顔をして眺めた。お品もちらつと東平の方をながめたやうに、彼には思へた。東助はじろりとお品の横顔を見つめた。

「久しぶりですね。私も商賣で損をしましてね。いまでもちよつとその話が出ましてね」

お品はじいつと東助の顔を見入つた。かうきいた彼女は仲々その目を東助の顔から離さなかつた。お品の毒だともなんともいはなかつた。そのお品の凝視のために、沈黙が氣味悪くこの病室にしみ渡つてきた。お品に見つめられた東助は、物臭さうに横をむいて、煙草入れから煙草をとり出して吸ひはじめながら、思ひ出したやうにかう言つた。

「兄さん。話だけなんですよ」

「話だけ。話だけでももうわしはいやだ」

「お願ひですよ」

「いやだ。いやといつたらいやだ」

東作がわなわなと慄え出したお品を見て、東助の袂をぐいと引いた。お品はもう見るに見かねて了つた。もう言つて了へといふやうな決心が、赤い血の氣となつて蒼褪めた顔から、日照つた顔に變つてきた。

「東助さん」とお品は口を切つた。「東助さん。あなたはなぜこの間お新にあんな手紙を下さつたのです。もう少しで父も死ぬだら……お前も淋しかろ……もう少し辛抱しろ……今に後始末にゆくから、……そしてつれて歸るからなんて手紙はどうしたのです」

東助の顔には當惑の色がありありとあらはれてくると共に顔色が物凄く青ざめていつた。そして東助がお品に反答する暇もなく東平が、むづつと起き上つてきた。

「わしが死んだら後仕末にくる……よく言つた。やれるものならやつて見ろ。いつたいお前たちは共謀でやつてきたのだな。わしを放り出しに來たのだな。よしやつて見ろ」彼の聲はぶるぶる慄えてきた。



「はるばる見舞に來てくれると言つたから、一日一日を首を長くして待つてゐた。さう思つたのがだい  
いちわしの大誤りだつた。ようもおめおめ入つてこれたものだ。もうこんなところへは來てくれるな。  
あつちへいつてくれ。お前ら二人はよくもまあ長い間わしを欺してゐたものだつたな……」さうして  
東平はぐたりと寢床の上に倒れた。この身が、この病める身がと彼はもがいた。

兄弟たちは確にうろたへてゐた。が首尾がわるくなると、今度は一步前へと進んできた。

「出來ませんか」

「出來ん」

「出來ないんですね」

「出ていつてくれ」

「さうですか。出てゆきませう」と東助は、身じまひをして、やはり隅の方でふるへてゐるお新をよ  
んだ。「お新。歸るのだぞ。臺灣へ。さあ、お父さんと」彼はやをら立ちあがつた。強ひて落着きの風  
を見せてゐた。

「お新をつれてかへるなら歸つて見ろ」と東平はまたもや、苦しうに身体を起しながら兄弟たちを  
睨みつけた。その時でも、彼はよもお新をつれてゆくまいと思つた。がそれは本當となつてゐた。東  
助らは東平を尻目にかけてもう立ち上つて歩いてゐた。東平の顔の中は一時に全身の血潮が沸騰しはじ  
めた。彼らの姿が彼の目から消えようとしたその瞬間、彼は大きな太鼓腹をかゝへながら、むつくりと  
立ちあがつた。ひよろひよろとよろめいた。彼の妻が「危い、危い」といつて引きとめようとしたけれ  
ど、彼は「やめてくれ」と力いづばいにふりはなした。

「こらまで。お前たち。なぜお新をつれてゆく」

「なにを言つてゐるんぢや」と應じたのが東作であつた。

「なに。まで。お新をかへせ。お新をかへせ」と東平はいまにも倒れさうな身体をしながら彼らのあ  
どを追ひかけた。けれども、彼らは足早に出ていつた。彼は走らうとしたが、満足に歩かれもしなかつ  
た。そしてどうたう闘の上につつ倒れて了つた。そして叫んだ。

「お新！」

「お父さん」といふ聲が幽かに聞えて來た。それをきくと、彼は先より一層はげしく、

「お新、よもやわしを忘れはすまいな。わしを。お新」と叫んだ。お品は「お父さん。お父さん」と  
叫びながら、東平の身体を起さうとしたが、びくとも動かなかつた。

「わしはい。お新をつれてきてくれ」

お品は必死の力を出して、彼をぐいと抱きこみながら引きづるやうにして室に入れやうとした。と東  
平は息をはづませながら言つた。

「わしはい。お新をつれてきてくれ。お新はわしのいのち……いのちだ」

東平は、いのち……だと言つた時、ぐつたりと氣がぬけたやうになつてきた。ひいひいと息をはづま  
せてはゐたものの、彼はちいつとあたりを見廻すほどの落着をもつことが出來た。月がもの凄く洗々と  
照りさへてゐた。いつの間にか風が出てきて、林檎樹の葉が何かをさゝやきあふやうにさらさらなつて  
彼方の方に消えた。彼はその音をぼんやり聞いたやうな氣がした。鳥屋の方を眺めた。くつきりと月光  
に照り出されて、七羽の鶏が一緒に仲よく並んで眠つてゐた。六羽ではなかつた。たしかに七羽ゐる、



あの病める鶏もあると思つた。それを見て彼はほつと溜息をついた。

彼を室の中へ入れようとして抱いてゐたお品に、彼は「もういゝ。もういゝ」と幽かな聲で言つた。そしてお品の顔を恐ろしく目をあげて、眺めてゐたかと思ふと「お品」といつたきり、大粒の泪が老の臉から、線をなしてあふれて出た。

「お父さん。しつかりしてください！」とお品は叫んで彼の大きな身体を、ぎゅつと抱きこんだ。その時東平は「あああ……ちから……」と言つたきり、凡てが、今迄の凡ての重みが、白い煙の幽かにきえゆくやうに、しだいしだいにどこかへ消えうせてゆくやうな氣がした。——さうして彼は全く意識を失つて了つた。

## 9

それから二十分程もたつたらうか、東平の家にまだ、醫者だけが來てとりたてゝ悔みにくる人もなかつた頃、お新が座敷の裏口からはひ上つて東平の死骸をいだいてないてゐた。

## 10

そして東平が死んでから一週間目にひとりぼちの白い牝鶏は、全く骨ばつかりになつて、宿木ぐまりぎの下の板の上に、黄色い腫をどちて死んでゐたのをお新が発見してきた。

—(二四二—一九)—

## 冬の日

石川 正三

白い仕事着を着た榮さんは剃刀の手を休めて、「へえエ、さうかねエ。」と思ひ出した様に言つた。飛んでもない時に斯う言ふのが此の男の癖である。榮さんに襟を剃らせて居る若い女が、フ、ンと笑つた。

「また榮ちゃんの十八番ね」

潰し島田の襟足をすらり伸ばして居る此女は、川岸の藝者だけれども餘り器量がよくない。寧ろ藝妓といふ艶かしい名に裏切つた、肥女の何だつまらないと思はせる程のお多福の一人である。初春の陽光に、隣家の魚屋から迷ひこんだらしい黒蠅が一匹、硝子窓に舞つて居る。一軒置いて向ふのうごん屋の茂公と、親方とは今や將棋盤を睨んで夢中である。

大抵の時は少くとも二十分は待たされる。併し一度來つてからは、何の因果か、此のよく待たされる、一向綺麗でない、舊式の理髪所へばかり來るのである。

何か未だに浮世床の面影のある様な家である。親方の形勢非なると見るや、下剃の菊公が酷く悦に入つてニヤニヤ笑つてる。仕事にいつもしかられる仇討ちのつもりかも知れない。

店は南向きなので一月の鈍い日光が、汚い窓口から、七福神の額のかゝつる敷居際まで、照りつける

が、石の多い川筋を流れて来る風が、粗末な雑作をもらて、伸ばした首筋をひいやりとさせるとがある。向ふの大橋には、人も通る、荷車も通る、三呎六寸幅の可愛い電車も、それに相應しい音を立て、走つて行く。併しそんな物に無神経な床屋の連中は至極泰平である。親方は飛車をせしめられ擧句の果に王將が雪隠詰めになつたので、例の慣用手段の待つたをした。

「變だな、こんなわけぢやなかつたが」

親方の待つたを主張するのは逃路を探し出すためと、同時に又降参の時期を暫し延期するための横着な計である。三十六計も三十七計にならぬ限り、途中で勝負に邪魔が入らぬかぎり、何時までも取り上げた煙管で未練の煙をふくつもりらしい。

茂公は隅の方へおしつけて置いた岡持へ手をやりながら、得意さうに笑つて居たが、

「駄目だよ、親方。降参しなよ、俺や歸るよ」

「ナニ、もう少しだ。この歩をとれば、斯う行くと、さうすると、あの角をとつちめてと、オイ、敵に後を見せるは卑怯なりだ」

茂公も一寸たぢらひながらも、

「夜にしたよ、お上さんがあこに立つてるから」元氣の聲で鼻唄まぢりで行つた。

「お鼻は剃らないでしたね」さう問ひながら、そのくせ剃刀を棚に置いて、榮さんは、高くも無い女の鼻を斜に、如何にも残念さうな顔付きで見下した。

「え、耳だけでいゝの」

女は鏡の中に居る自分の圓い顔と睨めつこをして居た。成るだけ佳く見えるやうな表情をして、なけ

無し of 長所を誇大しては己惚れる事に努めて居た。鏡は正直に有の儘を映すのだが、人間——殊に女性には鏡に虚偽の報告をさせることに熟練して居る。鏡が多くの人に好かれるのは其の爲に違ひない。

さう言へば、私だつて、時々自分の顔の細いつくり——例へばせまい額や、低い鼻や、特に中途で切目のついてる眉等はすつかりわすれ果て、ちつと見惚れる時があるから變である。

この私の眉については自分ながら怪しい程の剃刀ざらひだつたのです。

小學校へ上る頃までは、私達の方の習慣で、誰も彼も、新發意のやうに青い地の出る程、頭髮を剃つたものです。頭をいぢられることが、幼い時から、大嫌ひであつた。ばりかんでも承知が出来なかつた。あの音をきく今でも耳の上部の邊が痛むやうな氣がする。

小學校へ通ひ出してからも、頭の毛の伸びることが、一つの大きな心配の種であつた。父と母と、祖母と、三人が、りりで、一人息子の私の頭髮を刈らうとすることがある。明日が村の祭だとか、天長節だとか云ふやうな日に、そんな事が多かつた。そしてこの呪はれた眉の因縁話も實に是等の中の一、日突發したのである。

正月も近い師走の或日、日向の縁側で、いつもよりは大人しく、それは間もなく十二才になるといふ子供らしい自尊心の手前ではあるが、刈つて貰らひ初めた。最初前頭部を月代形に刈る間は無事であつた。多小の痛さは四肢に力を入れて堪へて居た。が併しとうとうあの所、耳の上部に來たとき、忽ち少くとも私と母とにとつて大事件が突發した。それは外でもないが、使ひふるしのばり、かんが數百本、舌頭中の毛髪を抜き去るかのやうな苦痛を與へた。その實十本位のものだつたらうが。

もう十二才になることも、學校であの泣虫の和作をいぢたこともすつかり忘れて、天地もとよむとば

かり泣き出した。母は百万謝陳する、私は腹癒せに泣けるだけ泣く。泣き出した弱虫のどがをすつかり母のせいにして。

孫思ひの祖母がきて、色々と宥めてくれて、兎も角も、母は祖母と代つて了ふことゝ、及びこれが終つたら、鹽煎餅と、熟柿とを貰ふことを條件として後をつづけることにした。

「なあ、敬坊や、このまんまで置くと、秋祭のとき新田でやつた、芝居に出る忠臣藏の定九郎みたいで、とてもいやな格好だんべい、ホーラ、これを見ろ」と言つて裏面の水銀が剝げかゝつて、所々渦巻状の曇が生じて居る古い型の手鏡をつきだして見せた。

「いんまに、お鈴つ子に惚れられる様になつたら、黙つてゝも刈りに行きやるわい」こんな工具にして兎も角も、頭の方だけは母の倍もの時間で漸くのこと、仕上げました。祖母さんは止せばいいのに常は剃つたこともない顔を綺麗にするつもりか、餘り切れない剃刀で當り初めたのでした。

そして切れないせいか、それとも祖母の老の手落ちか、右の眉を少し剃り込んだので、それと平衡させるために、今度は左を一寸剃るつもりでしたが、又右よりは少しそり過ぎて、どうく三分の一程剃つて了ひました。

併し當の御本人の私は知らぬが佛で、そのまゝ喜んで外へ飛び出して行つたのである。

幸子供同志のこととてそんな細いことには氣の着く者もなく、無事に済みましたが、夕飯のとき、お母さんがぢろく見てたが、遂に私の顔を洋燈の方へ近づけて、

「どうしたんだい、眉が變だが」

祖母はもぢくしたが、思ひ切つた様な調子で、

「あの剃刀がよく合せてなかつたもんで」と口ごもりながら答へた。

その晩はいつもより遅くまで、このことが氣になつて眠れなかつたが、いつの間にか母の顔も段々ちらつて、果ては時々に見えかくれして、どうどう眠つて了つたのである。

その痕蹟はいまでも残つて、もう亡くなつて了つた祖母や、父のことを思ひ出す種となつてゐる。この事があつて以來益々床屋へ行くことが嫌なことになつて了つた。

十三、四才になると、段々床屋へ行くやうになるのだが、私は「忠兵衛床」の親方、尤もその主人一人なのではあるが、その親方が嫌ひであつた。

おづ／＼入つて行くと、怖い顔をして睨む。何んしに來たといふやうな風をして、黙つて居る。

彼が、父の病氣の時、道具を擔いで刈りに來たのであるが、その時にお世辭を言つたり、笑つたりして居る。それに私が一人で行くと、物一つ言はずに、怖い顔をしてゐる。

髪の毛が一本、細い蛇になつて、一寸觸れても、天井まで飛び上るほど痛んだといふ話や、悪性女の髪が觀音堂の鐘の緒に巻きついて、どうして離れなかつたといふ話や、そんな頭髮に就いての昔譚は、幼い時から、私の頭に、きれ／＼によく滲み込んで居た。それで揮發油で洗つた髪を束ねたまゝ、風呂の火を焚きつけながら、火が移つて、こう坊主頭になつた、巡査の妻君も、この類の女だと信じた位である。

私はそれでも蓬々と伸びた頭髮に愛執を持つて、一日延びれば一日の安を食つて居た。私の頭髮は七八分位までは癖がないのであるが、一寸以上になると先きが縮れるのである。それが二三寸にも伸びて、蓬々と垂れ下つてゐる有様は、自分には氣がつかかなかつたけれども、實に見苦しいものであつたに違ひな

い。祖母や母が小さな苦勞にしたのも無理ならぬ次第である。

話は大分時間の隔りを經過してるが、私は自分の容貌に就いて幾分の意識を有つ様になつてからも、餘り床屋へは行かない。

ばんやりと腰をかけて、厭やな思ひをしながら、とりつけの新聞を廣告どころか、大嫌ひな有田ドラッグの大宣傳まで残らず讀んで了うといふ様な忍耐心は、とてもない。又かういふことは綺麗な店に限つて多い。

不思議といはうか、こんな理由で私は依然故郷の忠兵衛床のやうな汚い床屋を選ぶのである。忠兵衛床、之を略稱して床忠といふ。その床忠は髪のない、色の黒い、眼窩の凹んだ、年の割に老けて見える男だつた。

そしてその女房は女角力のやうな五尺二寸もあらうといふ大男で、他人に強い床忠もその前では全く頭が上らなかつた。

汚い障子で隔てた居室で煙草をふかして居て仲々出てこない。やがて、凹んだ眼で、空いた、モロツコ皮張りの固い椅子へ坐れど合圖する。これから一時間近い間といふものは殆ど眼を開かない。竹製の雲脂とりでがむしやらの頭をかきまはされると、知らず識らずの間に眼瞼の内側が熱くなつて来て、遂に小粒の涙が滲んで来る。さうすると私は憎い床忠に不覺の涙見られてはと思つて、子供らしい虚榮心でそつと拂ひのける。がいつでも床忠の奴知つてるんだ。「痛かつたかね」とお定りに聞きやがる。そして彼が日清戦争で受けたといふ咽喉の傷痕を見せびらかす。尤も床忠、即ち林忠兵衛は功七級金鵄勳章を有

つ帝國在郷軍人××村分會の名譽ある旗手である。

彼が中風にでもとつつかれない限り彼の一生續く唯一の誇りである。そして毎年下賜される六十圓の年金は、彼の一人娘の嫁入金として必ず貯金されるこのことである。

併し私にとつては依然床忠である。

縁の剥げかゝつた汚い鏡は、そんなにも大きくもなかつたが、普通の家のものよりは大きい。五度位の傾きで前方にづらしてとりつけてある。表の里道を歩く人の姿が、所謂足を空にといふ格好で、ちよいちよいとその汚ならしい鏡に映つては消えて行くのを見て、早くあゝして自由に表が歩けるやうになりたいなあ、それがズツと遠くの空想のやうにさへ思はれて美しかつた。

少しばかり頭を左へか右へか傾けて、鏡に映る憧れの影を見ると、床忠は無慈悲にも、螺旋でも差す様にぐいすと私の頭を仕事の都合のよいやうに押し付けた。私には随分、この三十分が四十分の時間が長い辛棒であつた。

たゞこれだけのことではあるが床忠は、鏡に映つた姿も見なくなつた。

この鏡のほかには、棚の上には招き猫と、化粧水の瓶が二本と、剃刀掛けとが目ばしいものである。或る時そのたつた二本の化粧水が五本に増したことがあつた。が床忠は決してそれを使用しなかつた。後でわかつた話だが、その餘分の三本の瓶は、彼が一生に之が最初でもあり、且つ最後でもあらうが、縣で一番大きい宇都宮市へ行つた時に、町の床屋で見た赤や青の美しい化粧水を見て来て、例の偉い女房に話した所が、女房は一生一代の知恵を絞つて、古瓶へラズベリーなんかの飲料水を入れたのである。

今でもあるかどうかわからぬ。

今年の冬の休みに歸つて見たら、もう床屋は止めて、宿場通ひの荷馬車引きや、田舎の人々の集る居酒屋にかはつてゐた。そして隅の方のすゝけた棚には、賣物らしいサイダ、ラムネ等が並んでるのを見て、思はず往時を思ひ出した。

こんなとりとめもない回想に耽つて居た。

剃刀やら、剪刀やら、刷毛やらが立ち代り、入り代り、ちらついていたが、髪を切るといふ感じは少しもない。さうして前面の汚い鏡に映つた私の頭はいつの間にかさつぱりとなつて居た。そして鼻目にはより眺望になつたやうだ。けれどもその間に一度魚屋が來たので、鰯にしようか、それとも鰯にしようかと、私の頭を棄ておいて、魚の吟味にかゝること、凡そ十五分間程して、再び私の頭髮にかつた。

親方の手際はまた一層傑れてるらしく思はれた。決して西洋剃刀は用ひない、泉州堺の住人云々の銘入りの日本風の剃刀を用ひてる。品だけは吟味してあるから之で二年間持つとのことであつた。又それを研ぐのに、決して兩手を使はずに片手で柄を持つて、ベタ／＼と砥石を撫でる。それでその剃刀のよく切れること、縁日の肥後守の小刀賣り以上で、ざら／＼と剃る音はして居るけれど、皮膚には殆ど感じない、むしろ快さを感じる。他人の剃られてるのを近くで聞いているといふやうな風である。

「サア御退屈様。」これですつかり終つた。

袂の中の金を探つて親方の腕に敬意を表して五錢の釣銭を氣張つた。

黒蠅は依然亂舞してゐる。外の街路は寒いらしい。

——一九二三、十一、廿——

## 山を買ふ話

窪川 鶴次郎

「大將留守かな、尤ももう三時だからな。」と二三度戸を叩いた彼は斯う思ひながら首を垂れ氣味に一寸傾げて戸口に人の出て來る氣配を待つて居る。待たせてある車の提灯の灯が、薄氣味悪く生ぬるい風に折々あたると見えて、彼の外套の裾の邊に灯影がゆらぐ。晩方から險しく曇り初めた空には星一つさへもなく、田圃五六枚隔てた向ひの山もそれと見えない。況して軒燈一つない街道に沿ふた片側町の貧しい田舎町のことであるから、提灯の灯影一間四方を除いては眞の暗闇である。ともすればあたりかまはず猛り立つて呼び起さうとする心を、彼は強いてにやにやと心に笑ひながら和めて間を置いては氣長に叩く。暫らくして後、家の中に障子の開く音がして芳吉が出て來た。

「あれ先生かね、どちらから。」

「うん一寸其處まで。」

「まあお上んなさい。」

芳吉は氣輕に斯う言つて中へ這入つて行つた。二人は上り框に置いてあるもう火の氣も無い長火鉢に坐り込んだ。

「山梨まで行つて來たがなう……。」

「ほう、どうもこんなに暖くちやあ明日あ雨だね」

「困つたや明日も又山梨へ行つて來にやならんが……」

「何かね重い病人かね」

「何さうでもないがの」

二人ともいつか煙草をふかしてゐる。芳吉が彼の家の出入である關係から暇な夜は、殊に冬などはいつも二人は世間話に夜を更かすことがある。芳吉は、大方何時ぞや世話を頼まれた看護婦のことに就ての話がてらに立ち寄つて呉れた位に思つて、火を作り土間へ下りて行つた。

「こうと」彼は小首を傾げた。彼は何か複雑した事を話さうとする時には必ず斯う言つて腦裏を整へるのが常である。煤けた廣告繪の貼り詰められた障子一つ隔て、芳吉の妻の躰が聞える。

今夜彼の行つた病家に丁度その隣の藤三が居合はせて此の頃彼が藤三から買ひ取つた山の話が色々出た。そのうちに、「どうだねあの位の山が先生千二百圓で手に入ることあ滅多に御座んせんよ」と藤三が言つた時今迄嬉しさうに眼を細くして話を聞いてゐた彼は、「ええつ、いや千五百圓だよ」と驚きの眼を睜つてにじり出た。

——之が抑々芳吉とそれから同じ周旋人仲間て且つ彼の家のお出入である清吾との惡計が知れた初めである。彼がこの山を買ふに就ては、清吾が主だつて雙方の話をつけた形になつてゐた。そして芳吉は大抵そのお伴役をしたに過ぎない。或日藤三の所からの歸り途に清吾は言つた。「なあ芳吉さ、どう考へたつて安過ぎるぜ。藤三さも案外眼がないなあ……。幾ら安いつたつて世話料は同じで、それぢやあ先生が丸儲けさ……。やい先生に千五百兩つて言はまいか。何それだつてちつとも高くないせ。何とか

言つたつて其處は今日俺ん獨りで先生ん所へ行つてうまく欺し込まあ」芳吉は話を聞いてゐるうちにいつか自分も其の方が當り前だと思つてゐた。それでも、「それやあどうかなあ、發れもしまいが屹度そりや高いつて言ふな」と言ひながらも結局暗黙の内に千五百兩と觸れ込むことになつて了つた。

兎も角もと、急いで病家を立ち出た彼は芳吉の家へ來る迄ずうつと車の上でどう仕様斯う仕様と考へを廻らしたのである。といふのは何うしても芳吉が言ひ出した事ぢやない。それに高過ぎると思つてあ最後の値段の掛合にやつたのは清吾だ。彼奴が歸つてきた時、晩飯を食べながら「暇があつたから今日はすつと山の奥の方まで行つて見たが、先生あれは千五百兩でも安う御座んすぜ」斯う言つて一座を見廻した。そして彼の妻が、「お歳暮には又何だね……ホホ……」と言つたら彼奴は急に眞顔になつて黙つた。彼奴に違ひない。併し迎も面と向つては言はれやしない。清吾は金の事にかけてたら眼は無いが非常に氣轉の利く頭の好い人間だ。日露戦争にも出征して軍曹にまでなつた男だし、今では町内の消防小頭もしてゐてその學力と家格に不相應な程の信用がある。それと言ふのも皆義侠とか名聲に執著が強く何につけても誠と親切があるからだ。彼の家が女中看護婦まで皆流儀に罹つて床に就いた時、清吾は一週間と言ふもの家が歸らずに粥、藥のことまで萬事萬端獨りで別に看護婦も雇はない一家の世話をした。それに今迄随分彼には出來さうも無い色々その他との交渉を見事にやつて呉れた。それに今迄一度だつて互の間に氣まづい思ひをした事は無いし、又そんなことがあれば必ず彼に寄り着かなくなるに定まつてゐるものであつて見れば、之から先の事を考へるにつけても猶更清吾にはこんな事は話せない。……時々俤が曲り角や石ころのある道へ來ては劇しく揺れる。……斯う考へてくればたとへ芳吉の發起したことでないにした所が彼奴に話すより外に仕方ない。商賣にも似合はない馬鹿正直な至つて氣の好

い男だ。それに今迄あまり厄介も掛けた事はなし芳吉に對してなら何だつて言へる。……さうだお常さどあれだけの關係がある以上。……そしてこの問題を「如何に解決す可きか」と考へ廻らす中にも段々心は甘くなつてきて、兎角お常の事を思ひ勝ちになりつつばんやりしてゐる中に俾は芳吉の家に着いのである。

芳吉は積み重ねられた炭の隙間を狙つては念入りに吹いた。そして二人の顔に反映する程に火が起つてきた。心の隅に壓し縮められてゐた一物がいささかの秩序を保つて胸一杯に擴がつた時、初めて彼は暫らくの沈黙を破つて口を切つた。

「病家に丁度藤三が見舞に来てゐるの……」

數多の死に直面して來たこの老醫師も征服快の興奮に聲が震へるかと見えた。

「ほう」

藤三と聞くや電光に打たれた様に身も心も竦んだ。併し彼の言葉は除々に進んだ。

「色々山の話が出たが……お前等は困つたことをしたぢやないか」

「な……何ですか」

驚愕と恐怖に驅られつゝ、おびえ竦んだ芳吉の眼は叫んだ。次第にうつ伏した顔の陰に眼は劇しくしばたき、兩手は震へを帯びつゝ膝の上に固く揃へられた。

「何だとは何だえ……三百圓も袴を穿いといて。……病家先まで私の面汚しをしたの」

「……………」

「何うして呉れる積りだえ」

「濟みません」微かに唇が動いた。いつか眼瞼に絞られる様な熱を覺えて眼を落してゐる膝の縞柄がぼんやり霞んで震へてゐる。

「濟まんで濟むかえ。……大方清さに誘はれたづら」

「……………」慙愧と悔悟の念に押し詰まつたまゝ芳吉の心は不安の果しな底へ沈んでいつた。再び沈黙が初まつて彼だけは煙草を喫ひ初めた。そして彼は言つた。

「まさかお前までこんなことをするとは思はなんだ喃。あんな清さみたいな金に掛けちやあ眼がない奴に誘はれて何うする積りだえ。はあこゝなつちやあお前もお了ひだによ。そんな腐つた根性ぢやあ之から先もいつ迄立つても浮ばれなあ」

聽て明け近いと見えて鶏の鳴く聲が聞える。凝と芳吉の姿に見入つた彼は益々能辯になつていつた。

「お常さのことを思はんかい。女の優腕でいくら働いたつて知れてるぢやないか。おまけにこんな田舎の髪結ひぢやあ。それをお前はまるで食はして貰つてるもおんなじぢやないか。お前が正直だ正直だと言はれた取り柄が無くなつちやあ、はあ仕事がなくなるによ。まつ先に私等の家に來られんわ。之から先さうさうお常さだつて身體が續きやせん。馬鹿だ喃」

「まさかお前等を……聲を低めて……繩付きにしたかあない。それで今度のことは藤三さ等にも口止めをして置くし私等だけの間のことにしておくだ喃。清さにも私から何にも言はんで、あゝ云ふ氣の強い奴のことだでお前からうまく言つてお呉れ。それから明日お前一人で直ぐお金を持つて行つてお呉れ。清さに言ふのもその後での」

斯うして彼等は別れた。



その翌日のことである。芳吉が停車場に着いた時、芳吉には自分が今の今千三百圓と云ふ大金を盗んで高飛びし様としてゐる所だ、等とは何うしても思はれなかつた。さう思ふにはあまりに彼に取つては事件が大き過ぎた。

今日彼は晝頃家を出て藤三の家に急いだ。水田を吹き渡つて来る身を切る様な風が端居つた股引履きの足や襟首に吹き込む。疾風の様に砂煙が立つては電線がごうつと鳴る。人通り稀な眞白に乾いた街道は果しがない。此の寒さにさうでなくてさへ心細いものを歳の暮ではあり、其の上こんな事になつたと思へば泣き出すことも出来ない悲しいことであつた。さうして先生の不合理な仕打を怨みもすれば清吾の身を羨やみもしても結局自分等が悪かつたのだと思へば何處にも遣り所のないその悲しさは一入だつた。そして握つてゐる手の脂で温かくしつとりとした財布を懷の中にまさぐり／＼思ひ浮ぶのは只愚癡のみだつた。斯うなればこの暮はもう先生に金を貸して呉れなんて頼まれもしない。あつちこつちの借金、その中でも去年から借り越しの奴位は、それも拂へるか分らない。……藤三からも今から行つて又散々聞かされる。厭なことだ。……家へ歸れば嬬のことだ、また氣狂ひの様になつてこの極道野郎はと今朝と同じ啖呵を切るにきまつてゐる。いつか清吾が言つた事がある。何だかお常さんと先生は……と。大方さうづら。之から先もあの見暮ぢやあもつと……ちえつ。……固く彼は財布を握り占めた。この千三百兩を持つて……と心に閃いた時腹の邊がわく／＼して冷たい水が腋の下に滲み出た。足は次第に早くな

つた。それから遂に彼は藤三の家へは行かないで東海道線のある驛に向つて追はるる如く風の中を急いだのである。

總ては夢の様であつた。彼は待合室の横の運送荷の蔭に身をひそめて、大分西に傾いた陽に向つて蹲踞んだ。眼は始終知つた人を探し恐れた。一体何處へ行かうとするのか。大坂、朝鮮、満州、支那それとも東京、横濱、北海道、樺太と目星い所を指折つて見た。そして漫然と考へ廻らした果は北海道、北海道に行かうと定めた。行く先も定まり之で先づ少し安心と心が静まつてくるに従つて逃ぐる者の心は善良そのものとなつていつた。彼は先生に詫びた、心の中に手を合はせん許りにして。その代りお常はごうなりとでも、と彼は思つた。彼の心は、凡ての人に對する畏恐、郷土に對する愛着、たゞ只管な悔恨の念と次第／＼に浸されていつた。而もの晩暗くなつてから芳吉は遂に北海道を指して東京行きの汽車に乗つた。

——一九二四、二月一日——



## ある情話

（「フィオドル・ドストイエフスキイ」より）

## エノイ・ドストイエフスキイ

（これは、一九二二、一〇、三〇のドストイエフスキイの百年祭のために、彼の娘が本國で出版が出来なくて英國で出版した父の評傳なる第十章のみの翻譯である。この中のマリヤ・ドミトリヴナは著者の母ではない。彼女の母は一八六七に結婚したアンナ・グリゴロヴナであらう。すなはちこの事件は殆ど秘密にせられた事件でまだこの著者が生まれない、一八六一年頃即ちトゥルゲニエフが「父老子」を出した頃に起つた。ある本には、この中の女主人公がオリンに彼が晩年あつた時、どうしても彼は女を思ひ出すことが出来ず、つひに女は絶望的に「私は覚えてゐられぬ筈がない」と繰り返して去つた程だ、と言つてゐるけれど、彼の娘は、非常なる事件として描いてゐる——譯者）

シベリアから歸つてくると、私の父は兄のミハイルが名高い若い作家たちの群にとり圍まれてゐるのを知つた。私の伯父はゲーテやシルレルを立派に翻譯したため、露西亞壇文に頭角をあらはしてゐた。そして自分の家に親しくその頃の文學者を集めることを好んでゐた。このさまを見て、私の父は新聞を發行したいと申し出た。父は監獄で見つけ出した、しかし露西亞の社會はそれに全く聾啞然としてゐる露西亞の大理想を、智識階級に訴へんと焦つてゐた。新聞の名はヴレミヤとなづけられ、仕事は兄弟二人に分けられた。私の伯父は編輯と會計の仕事を、私の父は文學的方面を受けもつた。父はヴレミヤ紙に小説や批評を出した。その新聞は大いに成功した。兄弟は、良い作家や、私の父を理解してゐる熱心な人たちの協力を求めた。昔の若い文學仲間のやうに彼を嘲る代りに、かれらは友達となり讚美者とな

つた。そのうちで二人は特に擧げるに價する、——詩人アボロ・メエコフ（ドストイエフスキイは彼を投獄少し前に知つた）と哲學者ニコライ・ストラホフである。二人は彼の生涯中忠實であり、また臨終にも侍つてゐた。

「死人の家」のち、私の父は最初の長篇「虐げられ辱められた人々」を出したが、これも大なる成功を得た。彼は再び訪ねはじめたペテルスブルグの文學會に、しつこく媚びられたりお世辭を言はれたりした。彼もまた公然社會にあらはれてきたのである。シベリアにゐる間に、ペテルスブルグの男女學生は露西亞壇では重大な役割を演じはじめてゐた。かれらは貧しい同胞を助けたため文學夜會を作りあげた、そこで有名な作家は自身の作物から、いゝ所を抜いて讀みあげてゐた。學生は彼らに報ゆるに、狂氣ぢみた喝采をもつてしたり、また野心家が青年に阿り諂つて得んとする役目を仰々しくも廣告したりした。私の父はその仲間ではなかつた。決して諂つたりしなかつた。却つて學生たちの嫌がる眞理を傳へるに、少しも躊躇しなかつた。それでも學生たちはそれを尊び、作家の誰よりも讚美した。ドストイエフスキイの人氣は、ポオリンといふ若い女によつて際立つてきた。その娘は露西亞にのみ存する「永遠の學生」といふ妙なタイプを表してゐた。ポオリンは金持の親類がある。あるロシアの州から來てゐた。親類はペテルスブルグで樂に暮せるだけの金を與へてくれてゐた。毎秋きちんと彼女は大學の學生として名前を入れてきたが、決して試験を受けなかつた、少しも研究しようとしなかつた。とはいへ女は熱心に大學へ通つた、そして男の學生たちと巫山戯けたり、室を訪ねたり、仕事の邪魔をしたり、反抗をけしかけたり、抗議に署名させたり、凡ゆる政治的催しに加はつたりした。そんな時は彼女は眞赤の旗をもち、マルセイユを歌ひ、哥薩克兵を欺したり煽動したり警察の馬をぶんなぐつたりして、い

つも學生たちの先頭に立つてゐる。彼女はそのため警官にひつばたかれ、一夜中警察の地下室に拘留されるのが、常だつた。大學へ歸ると凱旋として學生たちに胴上げをせられたり、ツアル政策の光榮ある犠牲として喝采された。ポオリンは學生の催してくる凡ゆる舞踏會に、あらゆる文學夜會に出席して、踊つたり喝采したり、うら若い心を激動してゐたあらゆる新思想に首をつゝこんで見た。自由戀愛といふのは當時大はやりであつた。若い魅力あるポオリンはかはるがはる男をかへたり、また歐洲文化の目的に仕へてゐるといふ確信をもつて美の神に仕へたりして、烈しくこの最新流行をとり用ひた。彼女はドストイェフスキイの成功を見て、學生へのこの最後の多情を彼とともに味はうとあせつてゐた。かの女は、私の父のまはりをうろついた。そして父に艶書を書いてきた。その手紙は父の書類中に保存せられてゐる。その手紙は單純で内氣で詩的なものであつた。かの女は文豪の天才に眩惑された臆病な若い娘であつたかも知れない。ドストイェフスキイはその手紙を感動しながら讀んだ。それは丁度彼が最もつぶさに愛を求めてゐた頃であつたのだつた。彼の心は妻の裏切のためひき裂かれ、彼も馬鹿にされ易いものと思つて自嘲してゐた、さうして今や若々しい美しい娘が自分の心を投げだしてきたのである。實に彼の妻が、その時こそ間違つてゐたのだ。彼は強盜殺人と獄で勤めてきた後でさへも、あひかはらず愛されたかも知らない。父は運命によつて捧げられた戀愛をしつかり握りしめた。が彼はポオリンの輕薄な身持を考へなかつたのである。といふのも私の父は話しかける演壇からのみ學生たちの生活を知つてゐたのだ。彼らは神を祖國を文化を語る自重ある群となつて彼をとり圍んでゐたのだ。皆に畏敬されてゐるこの卓越せる作家を、彼らの汚い細い内狀に導き入れるといふ考は決して懷かれなかつた。あとになつて彼らはドストイェフスキイのポオリンを愛してゐることを知つても、彼女の性格を

注意深くも、明にしなかつた。父はかの女を當時ロシアを風靡してゐた大袈裟にこなへられたる女子解放思想に、有頂天になつてゐる若い田舎娘と思ひ違ひしてゐたのである。彼はマリア・ドミトリヴナが醫者に見放れたことを知つた、さうしてまた二三月月してポウリンと自由に結婚出来るものと思つてゐた。彼は結婚を待つてゐる力も、世間や傳習を無視して自由に申しこんできたこの若ものの戀をはねつける力も、もつてゐなかつた。彼は四十歳であつた、しかもこの年までいかなる女も愛してくれはしなかつたのである……。

この戀人たちは蜜月旅行を外國でやらうとさめた。私の父は長い間歐羅巴を旅行しようと思つてゐた。二十歳の父の生像、イワン・カラマゾフもまた外國の旅を夢見てゐる。彼によれば歐羅巴は單に廣大なる共同墓地であるが、しかし彼は偉大なる死せる人々の墓に參らうと思つた。今やドストイェフスキイは遂に十分の金を得たのだ、かねてからのこの夢を實現しようと思つた。出發の日は迫つてきた。がいよいよとなつて、父はヴレミヤ紙に關した用事のため、ペテルスブルグに引きとめられて了つた。私の伯父ミハイルの飲酒の發作は益々度を増してきて、父が全部の仕事の面倒を見なければならなかつた。でポウリンは、バリで待つてゐると約して、獨りで立つていつた。二週間たつて、彼は女から一通の手紙をうけとつた。それは私はバリで知りあつたフランスの男を愛してゐるといふ文面であつた。「あなたと私の間は萬事終つげました」と書いてきた。「それはあなたの過なんですよ。いつたいなせあなたは私をひとりぼちにしておいたのです?」この手紙を讀んでからドストイェフスキイは氣狂のやうに巴里にそんでいつた。(彼はこの最初の歐洲旅行に際して何も見物せず、ベルリンやコロオニユを通りすぎた。あとになつて再びライン河岸を訪れた時、その美觀を氣にかけなかつたことをコロオニユ本

山に行つて許を乞ふた。ボウリンは彼を冷に迎へた。彼女は、自分の理想を見出したこと、ロシアにかへりたくないこと、フランスの戀人は自分を尊敬し全く幸福にしてくれてゐることを告白した。私の父は常に他人の自由といふものを重んじた、さうしてこの点に關し少しも男と女とを區別しなかつた。ボウリンは彼の妻ではなかつた。彼女は彼の誓もしなかつた、さうして自分勝手にふるまつた。それで彼女の贈物をとりかへすのも勝手であつた。私の父は、かの女の決心を聴きいれて、もうこれ以上會つたり話したりしまいと思つた。巴里にはなにも用がないと思つたので、彼はアレクサンダー・ヘルチエンに會はうと思つて倫敦に出かけた。その頃、あそになつて人々がトルストイをヤスナヤ・ポリアナに行つたと同様に、人々はヘルチエンに會ひに英國に渡つた。私の父はヘルチエンの革命的思想には共鳴するところではなかつた。が彼の人物に興味を感じ彼と知合にならうと思つて、この機會を利用したのである。彼は倫敦を巴里よりも遙に魅力あると思つた。彼はそこに暫時留つてすっかり見究めて了つた、殊に英國婦人の美の觀察に熱中してゐた。後で旅の思出の中で、女性美の最も完全なタイプをあらはしてゐると言つてゐる。このドストイェフスキイが若い英國婦人を賞めあげたことは頗る意味深いものがある。歐羅巴を旅行する露西亞人は一般に佛蘭西、伊太利、西班牙、匈牙利の女に、もつとひびく引きつけられるものである。英國婦人はいつたに露西亞人を冷淡にあしらつておき私の國人は彼らを「冷酷すぎる」と考へてゐる。がドストイェフスキイの好みは明により非東洋的であつた。若い英國婦人の美は、彼のリシウエニア人の心にあるノルマン人の琴線にふれたのであつた。

私の父は遂に巴里に戻つてきた、そして友のニコラス・ストラホフもまた外國にゐると聞いたので、ゼネバで彼と會はうとさめて一緒に伊太利を旅行しようと思し出た。その手紙の中にこんな文句がある、

「おれたちはローマで一緒に散歩しよう、さうしてまたゴンドラに乗つて若いベネチヤ女に口づけするなんて、誰が知らう」と。こんな文句は父の手紙には極めてめづらしいことである。この頃ドストイェフスキイは自分の瞳に自信をうるやうに彼もまた女に愛して貰へることを證さんと、女のある種のロマンスを憶がれてゐたことは明である。併しこの二人の旅の間には「ゴンドラには一人の若いベネチヤ女」もゐなかつた、彼の心はボオリンにあつた。併し彼はかの女に會へるかも知らない巴里へ、ストラホフと引きかへすことを拒んで、獨りロシアへと歸つていつた。彼はヴレミヤ紙にこの最初の印象を書いた。

春に向つてから、ボオリンは巴里から手紙を書いて來て、彼に不幸をうち明けてきた。フランスの愛人はかの女には不貞だつたが、かの女は男をすてる力がなかつた。女は私の父にバリに來るやうに哀願してきた。彼がこの行をためらつてゐるのを知つて、ボオリンはロシア女の得意の脅迫——すなはち自殺すると言つて脅かしてきた。彼は非常に驚いて、つひに巴里に出かけて、さうして見捨てられた美しいものをして、理性に訴へしめんとした。するとボオリンは彼の余りの冷淡さを見て、大袈裟な手段をとるにいたつた。ある朝七時に父の寢床のどこにやつてきて、丁度今買つてきたでつかいナイフをふりまはしながら、彼女はフランスの愛人は無賴漢で、彼を罰するには胸にナイフをつきさしてやりたい、さうして私は今彼の家へゆく途中だが、私が今やらうとする犯罪について警告しようとおなたに先づ會ひたかつたと告白した。私は彼がこの下品なメロドラマに欺されたかどうかは知らない。が彼はどうしても女にその大きなナイフをバリにおいて、さうして私と一緒に獨逸にくるやうに勸めてみた。ボオリンは同意した。これは丁度願つてゐたことであつたから。彼らはラインランドに行き、ウイスバーデン

に身をおちつけた。そこで私の父は烈しく魅惑されながら球轉の賭博をやつた。そして父は勝つた時は喜び、まけた時はあまり面白くない絶望を味はつた。あとで彼らは父が以前から魅されてゐた伊太利に赴き、ローマやナポリを訪ねた。ポオリンは會ふ人といふ人に巫山戯けちらして、彼に不安な思をさせた。私の父はこの格別な旅行を後年「賭博者」に書いた。彼はそのことを違つた事情にしてゐるが、その小説の女主人公の名にポオリンといふ名を與へたのだつた。

ドストイェフスキイの生活のこの頃について、私たちは二十代にはかく過なく生活してきた人間が、どうして四十代になつて、こんな愚なことをしたかと驚の餘り自分自身に尋ねて見る。それは彼の病的な肉体の發達によつてのみ説明し得らる。二十代には私の父は臆病な一學生であつた、そして四十代に初めて大抵の人が味ふ責任のない若々しい時代をすごしたのである。「二十代に愚なことをしないものは、きつと四十代にはする」と諺にも言つてゐる。この諺は年齢の奇妙な置換おきかへといふものが、私らが想像するほどそんなに稀らしいものでないといふことを證明してゐる。ドストイェフスキイのこの逃亡は正直なる人間——女とかの女の愛人に嘲笑されながら、彼の妻に貞淑な夫の反抗があつた。私の父は明に彼もまた妻に不貞であり、他人の輕薄な生活を導き、戀をもてあそび美しい娘を翻弄出來るといふことを實證せんと欲した。これが、その一例だといふ澤山の徴がある。たとへば、「賭博者」でドストイェフスキイは自分を家庭教師なる人物に描いてゐる。愛してゐる若い女にはねつけられて、この家庭教師は直に、輕蔑してゐる賣笑婦のところに走り、けれども自分の續けて愛してゐる若い娘に復讐せんためその賣笑婦と共に巴里に逃げてゐる。しかし欺かれた夫の復讐はさておいて、ドストイェフスキイのこのロマンスにも亦眞の熱情があつた。さて「賭博者」の主人公はポウリンについて語つてゐる、——「俺があれ

を絞殺し得るには、俺の生命の半を與へてもいい時があつた。俺は誓つていふ、あれの心臓にナイフをつきさすことが出來たら、俺は狂喜してやつたことだらう。しかも俺はまたおれに神聖なるあらゆるものにかけて誓ふ、シユランゲンブルグ山頂で、あれは『その斷崖から身をお投げよ』といったなら、俺はあれのいふことを聽いたらう、さうして喜んであれの言ふことをきいたらう」

しかしポオリンと共に、マリア・ドリミトリヴナに復讐しながら、ドストイェフスキイは病妻にこの事件の何事も聞かすまいと、あらゆる用心をしてゐた。彼は自尊心をとりもごさうと思つたが、不幸な病人に苦痛を與へたくなかつた。彼の用心は非常に効いたので、親類と親友しか、この挿話のすべてを知つてゐなかつた。しかしそれは彼の氣紛れな夢想的な澤山の女主人公の人物を説明してゐる。「白痴」のアグライ、「惡靈」のリザ、「カラマゾフ兄弟」のグルウシエンカその他數人は多かれ少かれポオリンである。私が思ふにナスタシア・フィリポヴナに對するロゴヂンの奇妙な憎愛の説明を見出すのは、私の父のこの戀物語の中である。

ドストイェフスキイは秋がくるとペルスブルグに歸つて、彼の妻の病氣が末期に達してゐることを知つた。不幸な女を憐むの餘り、私の父は怒を忘れテバアに出發して、最善の醫療をもちうるモスコへ彼と共にくるやうにさきふせた。マリア・ドミトリヴナの苦痛は冬中つづいた。私の父はかの女と一緒に留つてゐて、やむまもなくかの女を介抱した。彼はたまにしか外へ出なかつた、といふのは、この頃かいてゐた小説「罪と罰」に専心になつてゐたから。マリア・ドミトリヴナが春になつて死んだとき、ドストイェフスキイは、彼の友達に手紙をかい、尊敬して彼女のことをのべつ、その死を知らせた。彼は彼女とは幸福でなかつたとは思つた、が不和にもかゝらず彼女は彼を愛してゐたふりをした。自

分の名を重んずることは常に彼にとつては重大であつた、さうして友達から妻の裏切をかくさうとした。彼の親類のみ、この悲しい物語の真相を知つてゐる。私の父は更に心配して、死んだ両親を尊敬する情で養育してゐる繼子のパウルのためにも、この真相をかくさうとした。私は覺えてゐる、ある時間樂の際パウル・イサイエフは彼の父を輕蔑して、妻の手に懷かれた「濡れた襪襪屑」にすぎないと言つた。私の父は憤慨した、彼はキャプテン・イサイエフの記憶を辯護し、これからこんな言方で両親のことを言はないやうに禁じた。

私が已にのべたやうに、ドストイェフスキイは妻が死ぬと、ボオリンと結婚する意志であつた。しかし歐洲旅行以來彼の情婦についての考は變つてきた。その上ボオリンは全くこの結婚には氣乗してゐなかつたし彼女の自由を美しい娘として守つてゐたかつた。かの女が求めてゐたものは父ではなくして、父の文學的名聲であつて、就中學生との成功であつた。明にドストイェフスキイは流行兒となることをやめて、ボオリンは彼をすてた。私の父は直ちに「罪と罰」の出版をはじめた。以前のやうに批評家はこの傑作の初章に出會つて、最も聲高に吠えた。彼らの一人はラスコニコフなる人物に於てロシアの學生を侮辱したと公衆に知らせた。たいがいの無茶なことのやうに、この無茶なことも、ベテルスブルグでは大成功を得た。でドストイェフスキイを病的に讚美してゐた學生たちは、彼にそむいて赤の他人となつて了つた。私の父はもう人氣者でないことを知つて、ボオリンはもう彼を要しなかつた。彼女は、自分の目に神聖なる人間、すなはちロシアの學生に對する凌辱を恕することが出来ないと言ひはつて、父と絶交して了つた。私の父は抗らはなかつた。彼はもうこんな愛については何の幻影をもいじかなかつた。

註 (2)(3)(4)(8)(9)以外は著者註

- (1) この頃はロシアには若い娘たちにさつて、女學校以上の學校はなかつた。政府は假に男學生と共に大學で研究することを許してゐた。
- (2) 一八五七、彼はマリヤ・ドミトリヅナとお互に憐み合ひお互に愛しあつて長い間の困難をきりぬいて結婚したが、彼は癩癩に苦しみ、妻はヒステリーと肺病に苦しんだ。そして夫婦喧嘩ばかりしてゐた。
- (3) ロシアの社會主義者の小説家で英國に亡命してゐた。數年後にドストイェフスキイはヘルチエンがロシア人の魂を少しも理解してゐないので攻撃してゐるといふ。
- (4) 「夏の印象に於ける冬の記録」
- (5) ドストイェフスキイは英國の將來について妙な豫言をしてゐる。彼は英國人が、大ブリテン島を結局放擲するだらうと思つた。「我々の息子たちが、英國人の歐洲離去を證明しないなら我々の孫がするだらう」と豫言した。
- (6) ドストイェフスキイは歐洲最初の旅行中球轉を知つて、かなりの金額を儲けた。最初は賭奕は余り彼をひきつけなかつた。彼が球轉に熱情をえたのはボオリンの第二回の旅よりづゝ前であつた。
- (7) ボオリンの馴染中、ドストイェフスキイは決して病妻の世話をおこたになかつた。彼が伊太利に旅行してゐた時、彼は時時兄ミハイルに手紙を送つてグレンヤ紙に出した論文に對して彼に相當する金を妻に送つてくれと云つた。
- (8) 一八六四、兄ミハイルも、アポロ・グリゴリイフも死んだ。
- (9) マリヤ・ドミトリヅナの子、父は總督秘書官で酒飲の肺病やみて早く死んだ。
- (10) 彼の名高い作で彼は最も著しい千里眼を示した。「罪と罰」の最初の章が、出版される數日前、ラスコニコフに似た殺人が起つた。「凡ては正當である」と信じて私の父の友達にひびくこの暗合に驚かされたが、批評家は決して引かれもしなかつた。しかしドストイェフスキイの千里眼は私たちの學生を辱しめるどころか、單に歐洲が私に豊に供給されてゐる無政府主義のユトピアが彼らの未熟な精神でいかなる破壊が行はれたかを示したといふことを理解せしめてゐるといふべきである。

## きささぎ抄

大野 正

病 臥

きさらぎの雨しつとりす枯コスモス  
 花枇杷や門に出てみる子の遊び  
 霰なごる明みによひつ障子越し  
 寒雀障子の茜みだすまじ  
 冬の夜の火風うとまし枕もと  
 落葉だまりふみゆけば灯る朧かな

老ひらくの母に

夢にみし母かわいやな木の葉浴ぶ

ひとりごと言ふ母憶ふ冬銀河  
 たらちねとゐて障子に霧のなだるゝ夜

地震追憶

提灯になれてしづかな月夜かな  
 草にねて二十日の月を寒がりぬ  
 葉のさくらをりくひかる秋の暮  
 秋の夜の蠅に血糊をなめらるゝ  
 秋風にまともな海をおそれけり  
 山の灯のさむしと戸ざす十六夜

## 三人集

春雨

西堀 一三

知りあへる人にも會ひぬおほらかに傘さして  
ゆく春雨のみち

葉のあいまもれてしたたる細雨にややに濡れ  
ゆく梅の幹かも

梅の幹雨にぬれたる片側ゆあかるみいづる朝  
ぼらけかな

野のうた

野のはてに來ぬれば長く兩側の草のはのびて  
みちに垂れをり

陽の入りてあたりほのけき架<sup>は</sup>稻<sup>さ</sup>かげにかそか  
なるかなひるのかをりは

## 紀の川 能澤 五七

秋おそくこゝの山川鳴りしづみ下り來る人の  
まれにしありけり

山川の清きたぎちに立つ岩の邊にたつ波を羨<sup>こも</sup>  
しわが見し

瀬を早み岩にをりゐておぼつかな邊にしたぎ  
ちてしぶきつつ散る

日暮るればおのづ瀬は音に冴えいでて山べさ  
やかにひびきかへれり

星影の今はいや冴えて山川は細り光りつ瀬を  
早みかも



## 紅蓮供花

宮川彪

紅蓮供花

紅蓮のゆたけさみせてくづ折れぬ菩薩のらさ  
す宜しと見給ふ

合掌の心むなしくあげし腫にみ佛笑ます紅蓮  
花哉

みちのくへの旅

みちのくは秋さり早し北上の川の畔に萩の花  
咲く

思ひ出で

霧の夜は淋しく物を思ひたり遠近の灯の悲し  
き明滅

秋ばれ

墨すりて紅詩箋などとりだしぬ心涼しき秋ば  
れの午後

## 薄明

サイモンズ

大澤衛 譯

ながつきのながきゆふべは  
のちのへのきりにとけいる  
たそがれの萎ゆるにつれて  
いつしかにてりいづる星もまばらに。

くらきたにを夜ははひわたり  
うみかげにさすつきのごと  
あをざめしそらのくらみに  
野のはての樹のすがたしだいにきゆる。

かくていまゆふべとともに  
しづみたるさざりのみちを  
たそがれの萎ゆるごとたもとほりつゝ  
こひびとこひびとたざるを見ずや。



## 上着、舟、沓

イエーツ

「そも何ぞ なれかくも うるはしく かがやかしくすは。」

「さなりそは 悲歎の衣、  
人の眼に はしく見ゆるは  
あはれかの 悲歎の衣、  
人の眼に。」

「そも何ぞ 飛行の帆もて なが建つは。」

「われは建つ 悲歎の小舟、  
日も夜も 海原を驅る  
さすらひの 悲歎の小舟、  
日も夜も。」

「そも何ぞ ましろなる 羊の毛もて なが織るは。」

「われは織る 悲歎の沓を、  
いとひそか、かるき聲こゑ音は  
みなひとの 悲歎の耳に、  
さどかるく。」

## 歸郷より

8 ハイネ

うるはしき すなごりをとめ、  
舟上げて なぞわれに來ぬ、  
ちかく來よ てにてをかはし  
へだてなく ものがたりせむ。  
わがむねに まくらせよきみ、  
なにゆゑの かかるおびえぞ、  
あら海に ひごどゆだねて  
はばかりぬ きみが身なるを。

わがむねは うみにいと似る。  
 あらしはたしほのみちひき、  
 いなさらに 眞珠たまのむれの  
 そこふかく やすらふあるを。

## デエメル短章その他

中 野 重 治

静かに歩む

夕ぐれはせまり秋の火が燃えて居る  
 荊株の上に煙は二すちに分れ  
 私の徑はなほ見分けがたい  
 程なく夜が来る私は去らねばならない  
 一羽の甲蟲かぶこむしが唸りを立てゝかすめて行く耳元をかすめる

故 郷

かくて昔ながらの二親の家にさへ  
 かくてなほ夕ぐれにさへ些の平安もないのであらうか  
 外の面の高いぼらの葉すれを  
 心もそゞろに私は聞く

かくて静かに鏝かりがねを外すのを聞く  
 母親がらむぶを持つてはいつて来る

## 夏 日 晚 景

外氣はけざやかに曠野にやすらひ  
遙かに海はけぶり蘆荻がきらめく  
蘆荻の中に落日はもえ  
色褪めた雲はあからみ且つ幽かに光る

牧場からは鐘の音がわたり  
牧人はそのくたびれた羊を集める  
静かな林はおぼろにたそがれて  
一脈の露氣が温かな地におりる

若いらい麥は一すぢもそよがす  
この世から距てられた様に鐘の音も絶えた  
そして蟋蟀ばかりなほその讃歌を奏いて居る  
なべてこのやはらぎの中に

私の心臓よさあ元氣をお出し

## 私 達 の 時

もう暗くなつた お出で 家へ行かう  
お出で 栗の樹の繁みが私達に  
爪あるけものゝ様におひかぶさつて居る  
私達にこゝは  
あんまり寂しくあんまり息苦しい

ご覽 お前の手の線は  
私のにまるでそっくり似てやしないか  
お前は私に血のつながつた者の様に見える  
ちやんと知り合つて居る者の様に見える  
どこかよその國からでも來たのか知ら

私には妹があつたそして死んでしまつた  
さあ何かお言ひ まるで啞の様じやないか  
若葉の繁みをすかして

夕方の雲があんなにまつかに煙つて居る  
私達に近親相姦をせまる様に

お聞き こんなに荒々しく小止みもなく  
今あすこで啼いて居る夜啼鶯の様に  
お前の心臓は私の手の中にふるへて居る  
私達は知つて居る これで澤山なのだ  
私達にはこれで澤山なのだ

秋 (リ、エンクロサン)

庭にはもうえぞ菊が咲いた  
日輪の光も弱くなつた  
花は死を待つて居る  
霜の首斬斧にきられるのを  
叢林はすでにとび色に黒み  
木の葉は風の中にふるえて居る  
そして森が牧場が横はつて居る

ひつそりとして青い靄の中に

築地の桃

渡つて行く鶴

秋の悦びと秋の悲しさ  
凋れた薔薇と熟れた果物と

Die Symbolistin (マハラキント)

お前の眼は燃えて居るお前の息は馳けて居る  
お前は蒼白くて死のやうだ  
私はお前に尋ねる それはどうしたのだ  
お前は血のやうに紅くなる

お前の眼は悲みに拉がれて沈んで居る  
まつ毛は濡れてきらめいて居る  
私はお前に尋ねる それはどうしたのだ  
お前はなめ石のやうに蒼くなる

## 山 鳴 り

— 一幕 —

岡 良 一

## 時 處 人

九月 頃

北海道中部の高原

恭 造

快活なる果樹園主

三十七・八歳

静 子

恭造の妻

二十七・八歳

雅 夫

その一人兒

未だ幼し

源 造

粗樸なる召使の老爺

六十五歳

源 吉

源造の息子にてうすのろ二十二・三歳

武 作

村の若者

二十四・五歳

お 槇

武作の情人にして女中

十九歳位

## 第 一 景

果樹園の一部 林檎樹の畠つらなる。日の落ちんとする頃にして、葉裏には斜陽がはかるく映えてゐる。

源造舞臺上手寄りなる林檎樹の影に安坐して鎌を研いでゐる。水桶、数挺の鎌等がその身の廻りにおかれてゐる。

腰から手ぬぐひをぬきだして汗をふきながらゆつくり研いでゐる。

しばらくして恭造下手より登場五六挺の鎌をかゝてゐる。

恭造。

爺や、まだやつてゐるのかい。えらい精が出るなあ。

源造。

一寸見上げまた直ちに研ぎつゞけながら——それや、旦那さあ、若え時やあ銅羅の峠を日に三度も

往復したもんだもの、——旦那さあ、皆の者あもう歸りましたかね。

恭造。

鎌の穂をそろへて爺やの傍におきながら——あゝ、まあ後の畑だけやどうかこうか今日つきりで埒が

あいたよ。——さきあげた鎌の穂を日にかゝげながら——

まだ草ばかり五六反歩のこつてゐるのが困りものさ。

村のんだつてこう日照りがつゞいちや全く見てゐても氣の毒で仕方がない。

源造。

なに、どうせ暇時だから、旦那あ、みんなよろこんでゐるさあ。それにこの頃あゝして牧場も

紛争てゐるんだし——

恭造。

うむ、何だか武さあが原因とかでこたをかへしてゐるそうだつてねえ。今日みんなが草を刈りなが

ら噂してゐるのを聞かたんだが、村の者は誰一人牧場へはたらきに出ないとか言つてゐたよ。

源造。

え、もう誰も出ねえことにしてゐるだよ。ちつとあ、あゝしてしめておいた方が良、薬になり

ますなあ。

恭造。 一体どうしてそんなにつむじを曲げたんだい。だつて鐘が鳴つたとか鳴らなかつたとか大した事

でもなささうだのに。

源造。

えゝ、それあ、旦那あ、事の起りてのはわづかの事でございすだ。あの新田の武さあ——あゝ、

旦那あご存じでございすだ、あの武さあが、一昨日牧場の釣鐘台を直してゐた時に、はづみ食つて

鐘が鳴つたんでござえすだ。それで村の者あ、まだしまひに一時間餘りもあるに、揃つて鎌おい

て、家へ歸つたんでござえすだ。それで場長さあ腹立てゝ作さあを役拂ひにしたつてのが、まあ、

旦那さあ、起りつて言やあ起りでござえすだ。

恭造。ふむ、それにしてもひどい事をやるなあ。この大事な草入れ時に入れる者がゐなくては、牧場も困つてゐることだらう。

源造。なに。好え氣味でござえますだ。場長さあ悪えだよ。鐘釣台を直してゐれあ、ちつと位はもの拍子に鳴りもしやうつてもんだ。時ならぬ時に鐘を鳴らしたなんて、まるで武さあがわざと鳴らしたやうなと言ふていぢめるでねえか。それも平生が平生なら兎も角、あゝして大人しい武さあを、いぢめるに事を欠かして、可愛さうに、もうはたらいて要らねえなんて追ひ出すなあ、非道でござえましねえかよ。

恭造。いやいくら鐘が鳴つたつて村の人も村の人だよ。毎日働いてゐるんだもの、今が何時か位の見當がつかない事もなかつたらうにさつさと引き上げるなんてこの大切な乾草時につけこんで意地の悪い出方をしたものだ。

源造。それあ旦那あ、なる程退けでもねえのに鐘が鳴つたのを楯にとつて引きあげたつてえなあ村の者も悪うござえますだア。がまあせめて場長さあ村の者を可愛えがれあ兎も角あゝしてまるで四つ足ものかなんかのやうにこき使はれちや、血の氣のある者にやあ耐りましたねえだ。ふんどに良え悪えはとも角あゝしてちつとはしめておく方が今後のためにもならうつてものでござえますだよ。それにしても武さあこそんだ板ばさみになつてこの頃あもうぢい一つと引きこもつたきり、飯もすゝまねえんださうでござえますだよ、可愛さうに。

恭造。うむ、武さあが一番氣の毒だ。がさうひねくれて行つちや、まあ一寸まどまりもつくまいなあ。

恭造立ち上り中央奥林檎樹の下に行き樹枝にふれて見てゐる。

途切れ。

源造。——腰から抜き出した手ぬぐひで額をぬぐひながら——旦那さあ、今年あ夏越しに一苦勞ですぞい。

恭造。うむ、ほんとにこれはひどい蒸し様なあ。——ハンケチを取り出して汗をぬぐひながら——

源造。——振り仰ぎながら——さう、この通り林檎の葉つ葉あ巻きあがつてゐますだよ。風にしたつてまるでお山の噴孔<sup>あな</sup>からでも吹きあげて来るやうだあ。

恭造。——ふみ上手上に眼をあげながら——お山つて言へばこの二三日はさつぱり煙も見せないね。あんなに毎日根氣よく吹いてゐたのに………それにあゝして絶えず帯のやうな雲が頂をめぐつてゐるぢやないか。なんだか妙におちついてゐて氣味が悪いや。

源造。つれえ業だが、旦那さあ、お山と聞くとすぐと思ひ出しますだ。もう、この年になつてもお山の荒れだけや眼の前に見えるやうでござえますだよ。

恭造。あゝ爺やはあれはよく知つてゐる譯だね。………お前の二十位の時にあたるんぢやないか。

源造。えゝ、俺あ二十三の春のことだ、もう足掛け四十年も前のことでござえますだ。——研ぐ手をゆるめながら——御彼岸の中日つて言へあ花だ酒だで若えも年寄りも浮いた浮いたの時に、お山さあごおうと村も人もぶつとばしましただ。その日あまるで丁度こんな陰氣なうさん臭え照りが夜に入つてからも風ひとつあふらねえだ、旦那さあ、丁度赤えお月様圓るく峯<sup>さんま</sup>に出でござらしただよそれが、旦那さあ、村の者あみんな上氣嫌で寢靜まつたと思ひなせえ。にはかにはか風が出て來ただよ。——研ぐ手を止めてゐる——さうつ、さうつと木のやうに家さあゆれ返<sup>けえ</sup>しますだあ。俺あ家から飛び出た時あ、旦那さあ、もう風で流された灰柱あむしあつくふりかゝるでねえか。お山あ眞赤に燃えてるだあ。雷神さ

まのやうに鳴るだ。もう何一つ有たねえで俺あ逃げただよ。さうとう旦那さあ、夜の明けぬ中に燃えた岩さあこの谷埋めましただ。この畑だつて、牧場だつてみんな大沼の埋められた跡だよ。——夢中になつてゐる——その代り村あ湖になつた。沼の水さぶり返しましただよ。後一年だけ新田の櫻の木あ湖の底に咲いてゐたて言ひますだ。きれいな水の底にまつ白く咲いてゐたと言ひますだよ。親一人子一人のおふくろもこの水におぼれ死にましただ。——左手の甲で眼をこすりながら——村の人だつて大方死んで了えましただよ。——前掛け代りの布にて眼をぬぐひながら——旦那さあ、みんなあの湖の底にねむつてゐますだ。俺あこの年になつてもあの湖だけあのぞいて見るのも怖ろしうござえますだ。湖の鮒あ、一匹だつて口にし度くねえだよ——眼をぬぐつてゐる——

恭造。さうだ、その話は満更僕だつて平氣で聞くことも出来ないよ。爺や、悲しいのは、爺やばかりぢやない。僕の家だつて知つての通りお祖父さんもお祖母さんもお二人共あの荒れで亡くなられたんぢやないか。お祖父さんやお祖母さん許りぢやない。畑も田も、先祖代々の田地がすっかり燃えたざれた岩の流れに埋められたとは、小さい時からお父さんに聞かされたものだ。まあすんだ事は兎も角、かうして達者の身体を有つてさ、ねえ畑も今年からかうして立派な實を結ぶやうになつたし、それに爺やだつて、源吉があゝして成きくなつたんだもの、何ももう氣に病む事もない譯だ。まあ、達者に生きる事だけが一番だ。さうだらう、爺や。

源吉。いんや、旦那さあ、俺あ源吉のこたあ聞き度くねえだ。ふんごに俺も彼奴のためにや毎度毎度思ふ度びに泪が出るだよ。それも親兄弟に耳をかさねえ飲んだくれでもあれやまだあきらめ様もござえますだに、あゝして小さい時の患ひが原因で、成きくなつても人一人前のわきまへも無え者に育つて

呉れちや、旦那さあ、俺ああの子が不惑で不惑でなりましねえだ。馬鹿な息子ほど可愛いもんだつてよつく言つたものだ、つくづく吾ながら思ひますだ。

恭造。なに、爺や心配する事はないよ。畑も具合よく實入りがつゞいて呉れ、ばいくらあつても足りないのは人手だ。ほんとに爺や、是までの御恩報じにでも、せめて源吉ひとりには爺やに心配をのこすやうなことはしないよ。後の事は決して氣にしくつて良いよ。

源吉。え、旦那さあ、そう言つて下さるなあお前さまだけだ。旦那さあ、ふんごに俺あ手をついておたのみしますだ。源吉の面倒を見てやつて呉んなせえ。俺あ、あいつが不惑で不惑でなりましねえだ。

眼をぬぐつてゐる。この時下手より源吉登場

源吉。旦那さあ、奥様あお呼びでござえますだよ。

恭造。おお、源吉か。は、は、は、爺やの話に身が入つてついぼんやりしちまつた。——時計を出して見ながら——爺や、もう夕飯時だ。飯がすんでからまたゆつくり聞かうぢやないか。

源吉。——左手甲で眼をこすりながら——あゝ、すみましねえだ。何時もの癖が出てまた老人の繰り言が、長くなりましただ。

恭造。なに、爺やの話は力が入つてゐるから眼に見えるやうでおもしろい。ひとつ今夜はゆつくり聞かして貰はう。ぢやあ、もうおしまひにして、飯にしやうぢやないか。

恭造退場、源吉歸り仕度くに研石に水をかけて洗つてゐる。

源吉その傍に近より鎌の穂を揃えながら

源吉。お阿父あ、なにして涙出してゐるだあ。またお山の話でねえだか？旦那さあの前で涙なんか出して見つともねえでねえかよ。

源造。なに言つてゐる。旦那さあ、黙つて聞ゐて呉んなさるだよ。旦那さあふんごに親切だ——立上りながら——源さあ、奥様ごうかしただか。

源吉。あーに、なんでもねえだ。坊様少しお加減が悪えただよ。

源造。旦那さあも奥さあもお若えのによつく坊様可愛がられるだの。それにお二人さあ、荒え口ひとつきかねえで親切にして下さるだ。お前も皆さあ大事にしなけやいけねえだぞ、源さあ。お前えお横さあに惚れてるつて村の人の口の端にのぼつてゐるだが、そねえな事は言はれて、旦那さあに知れて見ろ。俺あ知んねえだぞ。

源吉。あに言ふだ、お阿父あ。お横さあ武さあどくつついてゐるだよ。武さあ俺あに畑でめつけられた意趣にそねえなこと言ひ觸らすだ。俺あ、ふんごになんにも知んねえだぞ、お阿父あ。

源造。そうか。それならえ、旦那さあ良え嫁さあ貰つて下さるだあ。あんなに氣をつけて下すつて俺あふんごにもつてえねえ位だぞ。——聲をおさして源吉を見守りながら——源さあ、俺あこれから先きあ、長えこたああんめえが、お前さあ旦那さあ大切にしてくんろよ。

源吉。お阿父あ、あにしてそねえ悲しいこと言ふたか？ねえ、お阿父あ、俺あ聞きたくねえだ。お阿父あからそねえなこと言はれると、俺まで泣きたくなるだぞ。

源造。——強ひて笑みをつくりながら——なに、なんでもねえ。もうお阿父んも良え年だでなあ、明けりや六十五ちやねえか。六十五つて言へあ、人間の坂あ十五年も前に越えてるだあ。つい年が寄ると心細くなつては愚痴をこぼすだが、まあお前さへ、しつかりしてゐて呉れりや、俺あなんの愚痴も小言もねえ譯だでなあ、譯つたろうなあ。——源吉うなづく。父立上りながら——さあ、行つてゆつくり飯としやうせ。

うせ。

父子上手に行きかける。下手より恭造取り急ぐ様にて登場、父子に聲をかける。

恭造。爺や、爺や、(親子ふりむく)急に坊やの加減が悪いから、今夜はすまないが町の本山さん許までおんぶして行つてやつておくれ。道が道だから、すまないがおたのみだ。なに、晩飯がすんだ後にゆつくりでいゝから。

源造。おゝ、坊様、そねえにお悪えでござえますだか。なに年はくつてもまだ三里や四里位の道あなんでもござえましねえだよ。ちやあ、飯食つたら直ぐお伺ひいたしますだぞ。

恭造。年よりをわづらはしてほんとにすまないが、時が時だし、ちあたのんだよ。

三人退場。

## 第二 一 景

恭造の家の一室、離れ屋を現はす。下手より上手半に至り横後ガラスをいれたる障子をいれてある。廻り縁にて戸には白き布垂れ上手側細くすき間あり。下手には枝折戸、植込みあれど上手は林檎畠に接したる趣き。林檎樹植ゑられてあり。その奥暗し。部屋中央天井には電燈がさもれてゐて下手床の間に人物肖像の寫真など置いてあるその前に林檎の果實が供へられてある。上手樹影の邊りより村の若者武作登場。足をしのびカーテンのすき間よりて中をうかゞふ。

武作。お横、お横、おい、お横さあ。——

下手縁よりお横登場。庭の氣配ひを見まはしながら、カーテンのすき間に武作を見出すやよろこびの様に

お横。おゝ、武さあ。何だかこう俺あ名呼ばれてゐるやうで、耳のせいかとも思つてゐただが、やつばしお前さまだつたか。俺あさんざ待つてゐただよ。



武作。——縁近く廻つて腰を下しながら——今しがた旦那さあ奥さあ達と畠の路を出かけさしただが、どうなさつただ。

お横。あゝ、今日晝下りから坊様が少しお加減が悪いで爺やが町の本山さん許までお連れ申したを、ついその邊りまで送りがてらに行らつしやつただよ。

武作。あゝ、そうか。子煩悩のお二人の事だで、それやきつい御心配だらうてなあ。がそれにしても、まあこうしてしあはせばかりしつゝいてゐては、ちつとはお二人に苦勞もあつた方が、張りがあるつてものだて。——途切れ、考へにしづむ表情にて眼を伏せ、またふたゝび眼を上げて——がお横、それにしても俺あ今度はふんどに困つただよ。話があるちうも實はその事だがなあ。

お横。あゝ、それと言ふのはあの釣鐘台の一件でねえかえ？

武作。うむ、そうだア。なあお横、はじめは俺あにしたとこで腹も立つただが、こうして村の人あみんな後押して下さるし、それに今時あ俺あのために牧場までは休んで下さるでねえか。もう、俺あ勿体ねえどころか、何だか空恐ろしくなつただよ。

お横。あゝ、俺あも旦那さあや爺やの話でうすうすは聞いてゐただが、飛んでもねえ事になつたものだね。俺あ、ふんどに他人事ぢやあねえもの。武さあ、お前なんぞかあてでもあるのかえ？

武作。うーむ、どうせ牧場もあゝもめてはなかなかどうしてけりもつくめえて——でなあ、お横さあ、元はつて言やあ俺あが初まりだで、こゝは未練も愚痴もあつさり忘れて、なあお横さあ、俺あつゝばしらうかと思つてゐるだが——

お横。——武作の言葉をひき取つて——えゝつ、武さあ、お前さあ俺あおきつばなしで、つゝばしらうつての

かい？ 武さあ、そねえ情ねえお前さあではなかつただに、武さあ——

武作。おい、お横さあ、お前えをうつちやつて飛ばうつて位えなら、今更あにしてお前ん處へ来るもんか。親兄弟ごころか親しい身寄りもねえ二人だ。いつまでも杖柱にならうつて約束あ、俺あ仇やおろそかにしねえつもりだ。なあお横さあ、それでこそ——

舞臺上手より源吉登場、武作ハツとして振り向き默す。

お横。源吉と顔を見合はせながら眼で一寸合圖する。

武作。——笑顔をつくりながら振り向いて——おゝ源吉さあか。お前え今頃あにして畑なご歩いてるだあ。

源吉。——腹立たしき面持ちにて——お前えこそあにして人の家へ默つて入つて來ただ？

武作。源吉さあ、お前どうしただえ。あに腹立てゝそねえなこと聞くだよ？

お横。な——に、源吉さあが腹なんかたてるもんか。なあ源吉さあ、さあそねえな處に口くゝつて立てゐねえで、こつち來いよ。仲直りをしやうで。

源吉お横の方を見て笑ひを浮べながら縁の處へやつて來る。

武作。源吉さあ、旦那さあや奥様まだ歸んねえだか？

源吉。あゝ、もう少しすれやお歸りだよ。——お横の方にむきながら——お横さあ、お前えこゝにゐただか。

お横。まあ改まつて、お前さあ俺あさがしてゐただか。

武作。ははあ、源さあお前この頃お横坊に惚れてゐるつて村の評判ぢあねえか。源さあもなかなか隅におけなくなつたなあ。

源吉。あに、そねえなこたあ、あるもんか。俺あなんにも惚れてねえだよ、なあお横さあ。

お槓。 あゝ、ほんとに源吉さあ俺あ大好き、俺あ源吉さあ大好き。そして二人共あんにも惚れてねえで仲良しだよ。なあ源さあ。

武作。 はは……— 目配はせなして立上りさま背伸びをしながら——さあ、俺あもう行かうて。

お槓。 立上つて縁より下りる。

源吉。 —さびしさうに——お槓さあ、お前えも行くだか。

お槓。 あゝ、一寸村まで用足しに行つて来るよ。あゝに、直ぐに歸つて来るだよ。——武作の傍により耳打ちをする——

武作。 源さあ、お前旦那さあお歸りになつても俺あ来てたなんて言ふぢやねえぞ。そねえなこと告げ口すると、これ——拳を上げながら笑ひつ、——これだぞ、源さあ。

お槓。 なゝに、源さあ俺あの中良しだもの、ねえ、源さあ。——源吉笑顔でうなづく——ぢやあ、源さあ旦那あ歸つてござらしたら誰も來ねえつて、お槓さあ一寸村まで用足しに行つたつて言ふだよ。

源吉さびしそうにうなづく。お槓、武作上手奥より退場。

源吉立上つて上手に行き二人の立ち去りし方をうかゞひ見てゐる。この時下手より恭造夫婦登場。

恭造。 —フト源吉の様子を見ながら——おい、源吉。なにしてゐるのだ。

源吉。 —振り返り當惑したる様に口ごもりしばし答へず——旦那さあ、お歸りだか。

恭造。 —笑ひながら——歸つていけなかつたのかい。はゝゝゝどうしたのだ、一体。

靜子。 まあ、ほんとに面白い顔をしてどうしたての、源さん。

源吉黙つて二人の面を見守りながら吾知らず笑ひ出す。

恭造。 はゝ……。源吉もこの頃はもう大分するくなつたなあ。——夫婦縁に腰を下す——

恭造。 お槓が見えないわ。——下手にむかつて聲を高くしながら——おまさ、おまさ。

返事なし、この時山鳴る音。しづかに葉揺るゝ音して風去る。

源吉。 —思ひ出したやうに——奥さあ、お槓さあ俺あ番してる間に一寸村まで行くつて出かけただよ。他に誰も來ねえだ。

靜子。 まあ、源吉さんがお留守をしてゐて呉れたの、すまないわね。——フト立上り縁つたひに下手に入る。——

恭造。 源吉、お前もこちらへ來て腰かけたらどうだい。そんな處にぼんやり立つてゐないで。

源吉腰かける。靜子片手にコップ、ビール瓶をのせたる盆を、片手に林檎の入つた籠をさげて登場。

恭造ビール瓶の栓をぬいてコップに注ぎその一つを源吉におしやりながら、

恭造。 さあ、源吉、遠慮なくお飲り。

源吉。 旦那さあ、俺あお酒は飲みましねえだよ。お阿父叱りますだで。

恭造。 なゝに、お酒ぢやないよ。まあ一杯飲んでごらん。

源吉。 —一口吸つて見て吐き出す——旦那さあ、えろお苦うごせえますだぞ。俺あもう頂かねえだ。——筒袖で口をぬぐつてゐる——

靜子。 ぢやあ、源吉さん、初實りをひとつお祝ひして貰ふことにしませうね。——靜子林檎を取り出してむきかける——

源吉。 —手を差し出しながら——勿体ねえ。自分のものあ自分でいたしますだ。お阿父あいつも俺あにさう言ひますだよ。

靜子。 まあ、源吉さんは随分お行儀が良いのねえ。さあ、ぢやあ自分でむきなさいな。

源吉。——受取つてむきかけながら——旦那さあ、お阿父あもう山越しましたただか。

恭造。あゝ、まだそんなに行きやしないだらう。上りがしたたかだから。なに、心配する事はない。どうだ、源吉。どうせ今夜はお阿父あんも歸らないことだから家で泊つて行つたら？——源吉の手つきに目をやりながら——おゝ、お前はなかなか手際がいい、ちやないか。果物の皮をむく事の巧い者にや好いお嫁が来るさうだよ。——夫婦は、えみ交す——

源吉。あに言つてゐるだ、旦那さあ。——丹念にうつむいたまゝ、むいてゐる——

静子。——林檎の一つを取り上げながら——もうこんなに大きくなりましたのねえあなた。

恭造。うむ初めての作りにしちやうまく行つたよ。僕たちにして見れば、丁度一諸になつた時に植ゑた苗木からの最初の收穫は色々意味があるやうに思へるね。ほんとにあの頃は小さい苗木であつたのがもうこうして立派に實を結ぶやうになつたんだもの。なんだかこう妙にこの仕事は僕達に結ばれてゐるやうな氣がして張りがあふよ。

静子。それにしてもあなた、もう坊やは大分行つたでせうかね。

恭造。いやまだお山の峠を上りかけた位だらう。なに、爺やは年こそ老けて居れ、なかなかの元氣ものだもの。心配する事はないよ。上り三里のあの峠を日に二度も往復したものだつて、今日もお晝に自慢してゐた位だ。が爺やにつけてもお父さんが生きてゐて呉れるとなあ。——床の間の寫真に眼をやりながら——こゝら一帯の草もよう生えぬ野つ原に果物を實らさうとさんざ一生苦心をかさねて、實るのも待たずにお亡くなりになつたんだからなあ——

途切れ、山鳴る音、木の葉揺るゝ音して風去る。

静子。あゝ、またこんな生ぬるい風が吹いて来る。——眼を上げてカーテンの隅より空をうかがひながら——それに

にあのお月様だつてこうぢい——つと死んだ人でも眼を見据ゑてゐるやうで氣味がわるいわ。

途切れ。

源吉。——むき終つて齒をあてながら——旦那さあ、お阿父あもう町につきましたただか。

恭造。いやまだそんな事はあるまい。なに、氣にしなくつても良いよ。

源吉。だつて俺あさびしくなつて來ただあ。

三人沈黙。

源吉。——つと立上りながら——旦那さあ、俺あもう行くだよ。

立上つて林檎を食ひながら上手奥に行く。二人それを見送る。

山鳴る音、つゞいて樹揺る。

更にはげしくふたゝび。源吉上手奥にたゞずんでゐる。

静子。まあ、今夜はひごく荒れてゐますのねえあなた、坊やたちは大丈夫か知ら。

恭造。うむ、何だか妙に氣味の悪い晩だね。が外ならぬ爺やのことだ。なに、心配は要るまいが——

突如、山激しく鳴る。風はげしく樹を揺る。

肖像倒れる音、しづか。ふたゝび山激しく鳴る。風はげし。しづかにひそまる。

ふと燈火消ゆ（うす青き光ほのかに人を照らしてゐる）

二人顔を見合はせながら無言。

たちまち青白き光カーテンに閃く。音はげしく。またひそまる。

恭造。妻の肩越しにその光を見、はつとして飛び立ち上手奥にかけよる。源吉おびえたやうに眼を上げてゐる。

恭造。——あわたしく——あつ、あれを見ろ！ あれ、静、あの山を見ろ。

靜子。—— 駆けつけ、しばし無言にて指さす方なながめてゐたが、失神したやうに夫の足許に倒れ伏す。

しばし三人無言、また光カーテンを走る。山鳴る。

源吉。—— 急に飛び立つやうにして恭造の手を取りながら—— 旦那さあ、あれ、あれを見る。山あ破れてるだあ。眞赤に燃えてるでねえか。あゝ、お阿父あ、俺あのお阿父あどうしただあ。

夫婦同時に眼をあげ又力なくうなだれる。妻急に夫に取り縋りながら、

靜子。あゝ、あなた。どうしたんでせう。あゝ、どうすれば…… 力なく打ち伏す——

源吉。—— 飛び立つやうに—— あゝ、俺あこうして居れねえだ。お阿父あ、お阿父あ、早く逃げて呉んろ。

お阿父あ、俺あ助けに行くだ—— 駆け行かんとする——

恭造。—— 源吉の肩を押へながら—— 源吉、どこへ行くのだ、待てつ、待てつたら待つてゐろ！ 何處へ行くつもりだ。

源吉。—— はげしく身をもがきながら—— 旦那あ、離して呉んろ。俺あ行かして呉んろ。俺あお阿父あ助けに行くだ。離してくんろ、旦那あ。

恭造。なにを言つてゐるのだ。お阿父あを助けるつて何處へ行くんだ。自分で死ぬやうなもんだぞ。

源吉。いんや、旦那あ、離して呉んろ。お阿父あ、俺あ今行くだ。旦那はなしてくんろ。—— 手を合しながら—— これ、この通りだあ。

恭造。—— しづかに手をはなす—— 行つてこい。源吉。死んでもお阿父んに遇つてくるんだぞ。

源吉夢中で上手に走り去る。恭造見おくる。目をふたゝび山へあげる電光鳴動しきりなり。

靜子。—— 突如面をあげながら—— あゝ、あなた。もう坊やは山を越えたでせうかしら、あなた。

恭造目をおとして、無言。

靜子。あゝ、わたしどうしやう。坊や、坊やが死ぬ。坊やが死んで、わたしどうしろつて言んです。

坊や、雅あ坊や。母さんが…… 走り行かうとする——

恭造。おい、どうしたのだ。何を言つてゐるのだ。—— 妻の両手をきつてちいっつと彼の女の眼に見入りながら——

ねえ、お前、おたのみだ。氣をしつかりと取りもどしてくれ。これ、靜子。

靜子。—— 狂へるこさく—— いーえ、いーえ、坊やに死なれてわたしどうすれば好いんです。わたし、連れ

れに行かう。坊や、雅あ坊や、待つて、おくれ、さあ、あなた、離して下さい。行かして……

恭造。おい、こゝにゐてさへ危ないんだぞ。それ、もう灰が降つて來てゐるぢやないか。坊やごころ

かお前の命が危いぞ。一間先きだつて見えはしないぢやないか。それに、何處へ行かうと言ふのだ。

—— 力無く—— おい、俺をうつちやつてお前ひとりが……

靜子。いーえ、離して、離して……

手をふりはごいて走らんとする、しばし競り合ふ。突如はげしき鳴動、遂にふりはごいて上手に走る。

恭造見失つた様にて踵跟さひきかへしながら力無く上手奥に坐す。鳴動一しきりなり。

恭造。あゝ、みんな行つてしまつた。みんな離れて行つてしまつたなあ。あゝ、だんだん激しくなる。

—— ハッき氣がついた風に—— 爺やはこの村まで岩が流れて來たつて言つてゐたぞ。(山を見上げる)

上手より武作とお横、驅けて來る。中央上手寄りにたち止る。

武作。おい、お横さあ、離せつたら離せ。お前え、あにしてそねえにしつこく俺をあつかんづるだか。

お前死ぬだぞ、死ぬ……

お横。いーえ、はなしましねえだ。俺あどうしてもはなしましねえだぞ。お前さあ、あにしてそねえな

こと言ふだ。死んでも一諸だアつて言つたでねえだか。俺あ死ぬならお前えと死ぬだア。さあ、つれて行つてくんろ

武作。 こんでもねえ、お榎さあ、さあはなしてくんろ。これ…… 女をつきはなして走る

お榎。 飛び起きて——お前さあ、足蹴にしただなあ…… バツタリ氣を失ひしごとく倒る——

武作。 下手にてふりがへり——お榎さあ早く逃げてくんろよ——走り去る——

鳴動しきりなり。

恭造。 しばらくに立上つてお榎にちかよつてからだを起してやりながら——おい、お榎、どうしたのだ。おい……

お榎。 急に身を起して恭造の裾を押へながら彼の面に見入りつ、——お前<sup>めえ</sup>さあ、よくも、よくも俺あ足蹴に……

足蹴にしただなあ。俺あ……俺あ…… 恭造の裾を押へたま、ガツクリうなだれる——

恭造。 おい、お榎。どうした。僕だぞ。しつかりしろ

お榎。 力無くふたゝび首を上げながら——あゝ……旦那さあ、旦那さあか。俺あ……旦那さあ、……俺あ

死に度くねえだぞ。——ふたゝび裾をはなして倒れる——

恭造。 膝をついてその両手をさりながら——お榎しつかりして呉れ、おい、お榎。——靜かに髪に降りかゝる灰

を拂つてやる——

鳴動一しきりはげし。叫喚の聲聞ゆ。

恭造。 あゝ、俺も……俺もこうしちや…… 立ち上りながら——あゝ、村の人みんな逃げて行くらし

い。——振りかへつて——靜子オ、源吉イ、おーい。あゝ、みんな行つて了つたのか。もう、もう、

どうして良いか譯らなくなつて來た。この林檎畠も、あゝ、親子二代の血と汗がすつかり亡びつくさ

れるのか。——力なくうなだれる、又顔を上げて、立上り、林檎樹によりそひその樹皮を撫でながら——あゝ。もう、何もかも失せて了つた。

光る、するどく、山鳴る。

しづかに力強く唇を樹枝に押しあてて。

光するどく走る。山はげしく鳴る。

恭造。 ——つゝ樹をはなれてお榎にあゆみより、肩に手をあてながら——おい、お榎、さあ僕と行くんだぞ。

お榎力なく頭をあげ手を合さんとして、又くづれ伏す。

恭造、お榎をいだいて、よろばひ立上る。

幕

## 石狩の兄弟

——一幕——

坂田 精一

現代 石狩川の畔

天野 音次郎

廿五歳

難破した石狩丸の船長

天野 圭一郎

廿八歳

音次郎の兄、天野兄弟運送所主

妹 冬子

丸田 讓吉

水夫頭

石狩丸遭難に於ける生残者

雇人。正太

平吉

市藏

他。醉漢 留吉

天野兄弟運送所内の一部。正面、板敷の土間。中央に粗末な卓子、二三脚の椅子。右手に出入口、仕事場に通ず。その邊まで荷が積まれて居るのが見える。正面奥硝子窓あり。左手は引戸にて次の部屋につゞく。空虚な室中のさま。晩秋の黄昏。

幕があく。仕事場の方に正太の鼻聲の松前節がきこえる、やがて平吉、市藏二人が、りで大樽を轉し乍ら出で来る。大樽を室隅に押しやる態よろしく。

平吉。

まあ、これで宜いぞ。(煙管をさり出し乍ら奥に向つて)おい正太。殘餘を詰めて置けよ。

正太。(奥の方で)そんな事言はねえだつて詰めて居るだよ。(二人煙草の火をつけ合ひ乍ら苦笑)

平吉。

彼奴。うんて言つた事がねえんだ。

市藏。

あれで、松前だけは一人前だから感心だよ。(暫時無言)

市藏。

旦那あ、今朝出たつ切歸らねえんだらう。

平吉。

うむ。

市藏。

何んせえ黙つて居ても此際旦那も苦いに違ひねえよ。商賣が商賣だ。たつた一つの身代が、浪にやられたら、殘餘も粕もありやしねえんだからな。

平吉。

音旦那が亡くなつちや旦那も心細いだらうよ。第一、音旦那が居ねえで船業なんかなつて行きやしねえだらう。

しねえだらう。

市藏。

(思案深かさうになつて)今朝旦那が出がけに、「俺にも考があるからな。俺も如何にか此處を切りぬけて見せる心算だから皆も今まで通り働いて呉れ」つて言葉だけは元氣だつたがな。淋しく笑ひ乍ら出て行く旦那の後姿を凝視して居たら何んだか目の縁がぼおつとして來たわい。

平吉。

旦那はあれで中々負嫌ひだからな。

市藏。

船はとも角、今之からといふ時に音旦那にぼつくり往生かれちや、いくら旦那でも心細からうよ。

平吉。

旦那がなんと言つたつて仕事をするとなつたら音旦那だからな。

市藏。

それに音旦那はあんな沈黙家でも何處かに兄哥のやうに皆に慕はれる德をもつて居た。旦那となると矢張り氣兼ね要るし、亦なんだか皆が憚つて居たやうだ。あの讓兄哥からして、もう、さうぢやねえか。

平吉。

旦那が何時か、それが面白くないつて言つてた事があつたせ。如何して皆が俺にもつと親んで呉

れないんだらうかつてな。

市藏。それは人の徳だからな。無理に勉めたつてなるもんぢやねえや。

平吉。旦那は随分苦にして居たやうだぜ。

市藏。好い人なんだよ。(言葉を轉じて)時に讓兄哥を見舞つたかへ?

平吉。彼男<sup>あれ</sup>か。もう快いんだらう。疲勞<sup>つかれ</sup>きつて居るんだから、そつとして置いた方が好いぜ。どれ。(二人また奥へ去る)

正太。新狐包を大手に抱き乍ら出て来る。

正太。あにき。何處へ置くんでえ。

奥の方で。鱒樽の上へあげて置け。

正太。だつて、おつ落ちるぢやねえか。

奥の方で。仕様のねえ奴だなあ。何處へでも置いておけ。

左手の方から冬子、簪を持つて急いで出て来る。纖弱な淋しい女。卓子の傍へ來てから二つ三つの咳に顔を紅にした、疲れたやうに身体を椅子に投げる。やがて漆黒な髪を一ふりふつてから懷中より歌集をさり出して卓子の上に置く。

正太。(隅の方で)旦那あ遅晩いだねえ。

冬子。正太。お前そんな所に居たの?

正太。ああ。仕事して居るだよ。(卓子の傍へ來る)お嬢さあ。これ何んだね。(歌集をさらうとする)

冬子。正太。嫌だよ。そんな黒い手で。

正太。(あはて、手を引込め)さうだかね。(不恰好な手を見て)俺<sup>おれ</sup>さ今まで鹽鱒<sup>しほびき</sup>を詰めて居たよ。

正太。(また臆病氣に本をのぞいて)何んだね?此の繪は。

冬子。お前には解<sup>わ</sup>からないよ。

正太。さうだかね。俺には解からないだかね。

冬子。(歌集から紙片を取り出して)これを讀んできかせやうねえ。私誰<sup>たれ</sup>にも見せないんだけれども。

冬子。正太。お前だけねえ。一番氣がおけないのは。

正太。俺<sup>おれ</sup>だつてお嬢さが居ると思ふと、なんだか世の中がぼーつと桃色みていに。

冬子。嫌だ正太。そんな事を言ふときかないよ。

正太。(まごころながら)不可ねえだかね。俺<sup>おれ</sup>何も悪い氣で。

冬子。ぢやあ、いゝから。そんな事を言ふもんぢやないのよ。さあ讀んで上げるからね。正太。私音兄

いさんの事を、うたに詠んだの。

正太。音旦那あ死んぢまつたぢやねえか。

冬子。私音兄いさんの事を思ふと泣けてく仕方がない。音兄さんこそ苦しみ通して死んだやうなもの

だわ。(左手の奥に人の聲。)

冬子。あら誰れか來たんぢやないの。

正太。旦那ぢやねえのか。(正太左手に去る。冬子椅子から立つ。)

醉漢と正太の喚呼罵り合ふ聲。

醉漢。今日といふ今日は直接に談判しねえぢやおかねえぞ。

正太。旦那が居ねえつたら解らねえのか。

茶色の帽子をかぶった田舎の壯士風の男と正太、つかみ合ひ乍ら舞臺に現はる。

正太。喉をしめやがるだな。おい皆んな出て呉んりよい。(泣聲を出す)

平吉市藏急いで仕事場から出て来る。

市藏。なんだ。留吉か。

平吉。また飲ひ酔つて来やがつたんだな。

醉漢。(醉眼にて應揚に)やあ諸君。

平吉。(腕をまくつて)おい留、何も言はねえで歸れ。

醉漢。歸れど? 幾ら遊人だつて用もねえ所へ來はしねえ。

平吉。また旦那から金錢をしばらくと言ふのか。好い事ぢやねえぞ。

醉漢。ごだにお前達の口を出す事柄ぢやねえんだ。俺あ、たつた一人の弟を奪られて失つたんだからな。

平吉。それを好い事にして何邊金錢を強請に來るんだ。

醉漢。強請? 強請ぢやねえ。とる可き金錢をどりに來るんだ。利益にかつて、あんな荒海に船を出

しておいて、男一匹を端金で始末する算か。來る度に、今は困る。その中に如何にかするからつてんで仕方なしに端くれで我慢して歸つて居るんぢやねえか。

醉漢。そつちで大きく出れ俺だつて只是濟まされねえからな。これでも居村で口きいと言はれて居る

んだ。事件が如何なれば如何つて位解らん俺でもないや。

市藏。(口を入れる)留、解つた。だがなあ。うちの旦那もあんなに言つて居るんぢやねえか。今ぢや困る

んだ。何にせえ虎の子の船を失ってしまったんだから、困難切つて居るのは他から見たつてわかり切

つて居るんだ。旦那だつて夜も殆ど眠れん位心配して居なさるんだし、その中に船の保険金が入ると

言ふからまあ如何にかならうと言ふものゝ、旦那も今の所只それだけを目當にして居なさる始末なんだからな。その時になつたら改めて纏つた金をやるつて言つていらつしやるんぢやあねえか。

平吉。留。今日は歸れ。

醉漢。歸らねえよ。

平吉。なに、歸らねえぞ。

市藏。まあ平吉、さう言ふな。なあ留、今日は本當に旦那も留守なんだし俺からも旦那によく言つておくからな。

醉漢。さうか。

市藏。なあ。さうして呉んな。

醉漢。さう言ふんなら今日は歸らう。どうせ亦來なくちやならんのだから。

平吉。へん。此んな兄を持つた弟こそ因業なもんだ。

醉漢留吉帽子を拾つて應揚に歸らうとする。

正太。うぬ黙つて歸るんか。

醉漢。何んだぞ。

正太。人の喉をしめやがつて黙つて歸る算りだか。

醉漢。.....

正太。おい何んとか言はねえだか。



醉漢。謝す。

正太。何んだと。

醉漢。謝す。

正太。人の喉をしめて謝すとはなんだ。(さびか、らうとする)

市藏。おい正太止せ。さあ留歸んねえ。

留吉左手より出て行く。

市藏。正太。直に日が暮れるんだ。ぐづくしちや居られねえぞ。

正太仕事場に去る。

冬子。(忘然として隅の方で見て居たが我にかへり) 困った人だわね。度々来るんだもの。

市藏。誰も相手にしねえんですからなあ。

その時、仕事場の奥の方で犬の聲がする。

平吉。旦那ちやねえか。

市藏。丁度好い所だつた。一足違ひで。(二人笑ふ)

仕事場の方から天野圭一郎出て来る。「おかへんなさい」一同挨拶する。

圭一郎。みんな、うまく片付いたやうだなあ。

市藏。へえ、大分片付きました。

圭一郎。ごく勞々々。

冬子。兄さん、今酔人が来て困つたわ。

市藏。なに、亦留吉の奴がくだを巻きに來ましたので。

圭一郎。(苦笑しながら) さうか。あれも其の中ごうかしなくちやならんと思つて居るんだが。

奥の方で。兄き、餘つた奴あ如何するだね。

市藏。よし、俺が今行く。

市藏平吉仕事場に去る。

圭一郎。(さも疲れたやうに椅子につく) あゝ疲れた。冬子、濟まないがお茶を持つて來て呉れないか。

冬子。はい。

冬子左手に去る。間、圭一郎亂れた頭をかきむしるやうにして考へ込む。

圭一郎。(冬子の持つて來た茶をぐつと呑んで) あゝうまい。だが冬子。お前あんまり無理をせん方がいゝな。

冬子。いえ。私別に。

圭一郎。家の方も一段落ついたら登別の温泉へでも行くんだねえ。

冬子。はい。

圭一郎。何だ。これは? 「亡き兄君のみ魂に捧ぐ」か(苦笑してから黙つて居るが) だがあんまり考へない方がい

いせ。(冬子目を伏せる。圭一郎何か不愉快相に考へ込む。)

冬子。兄さん。

圭一郎。なんだ。

冬子。保險の方はどうだつたの?

圭一郎。うむ。あれか。

冬子。.....。

圭一郎。(笑顔を作り乍ら)うまく行くだらうがね。何にしても保険會社なんて、いざ拂はなければならなくなる、何んだかんだつて理屈をつけるものでなあ。もと／＼拜み倒されて仕方なしに加入したようなものだが今になって見るとよかつたと言ふものさ。

冬子。きつと拂つて呉れるでせうか。

圭一郎。仕拂ふの仕拂はんの、問題ぢやないんだ。面倒になれば法によつてでも仕拂はせる事が出来るんだし、むかうでも、ごうせ拂はなくちやならんと思つて居ながら出し澁るだけなんだ。

冬子。さうでせうか。

圭一郎。何に。そんな事は問題ぢやないだがね。

冬子。………。

圭一郎。困つた事があるんだ。

冬子。兄さん、困つた事つてなあに？

圭一郎。全く意外の事なんだが。(………)

冬子。………。(兄を見つめる)

圭一郎。音次郎が生前私に黙つて此の家を抵當に入れてしまつたのだ。

冬子。あの！音次郎さんが。

圭一郎。うむ。俺も今日債權者に遭つて驚いた譯なんだ。

冬子。まあ。

圭一郎。俺も初めは信じられなかつたがね。しかし言はれて見れば心當りもある。

冬子。まああの音次郎さんがどうしたんでせう。

圭一郎。(皮肉な苦笑を浮べて)さうだ。あの音次郎なんだからおかしいぢやないか。

冬子。えい。

圭一郎。いつだつたか。こんな事があつたんだ。音次郎が俺を呼んで石狩の電氣に投資したら如何だと言ふんだ。此の先見當のつかない此の不景氣に、こんな商賣に頭をつき込んで居たんぢや生涯浮ぶ見込がないからといふんだ。音次郎がそんな事を言ひ出さうとは思はなかつたからな。俺も餘り意外だつたが、今更そんな無法な事を言ひ出したつて如何する。之からお互ひにうんと働く時ぢやないか、つて頭から吐りつけたんだ。その時は二三の口論もあつたが、音次郎が悪かつたといつたのでその儘すんだのだ。しかし今から考へて見るとその時にもう一部を電氣に注ぎ込んで居つたものらしい。技師だと言ふ男が二三度訪ねて來たのもさう思へば肯かれる。

冬子。………。

圭一郎。俺に相談をかけた時に石狩の電氣の計畫が資金不足で危いと言ふ噂のあつた頃なのだ。それから間もなくそれがつぶれたんだから、音次郎が注ぎ込んだ金もそのまゝになつて了つたといふ譯なんだ。

冬子。………。

圭一郎。もと／＼音次郎も悪い氣でやつたんぢやないだらう。行き掛り上つい深淵ふかみに落入つて失つたんだらうが、何故一言今迄うち開けて呉れなかつたらうと思ふのだ。假にも俺は兄であり此處の主人ぢやないか。陰で隠然こっそりそんな事をやつて貰つちや怨まずには居られないからな。俺も亦それ程頼りにな

らない兄でもない算りだ。いざとなれば親身しんみの間だ。總てを投うつてまでも抱擁しようといふ氣くらゐは充分にある算りだ。(考へ込む)事實今に始つた事ではないが……、いや止さう。何だか淋しい氣がする。

冬子。兄さん。

圭一郎。……………。

冬子。音兄さんを許して上げて下さい。

圭一郎。今になつて許すも許さぬもないぢやないか。いや俺も下らぬ愚痴を言つたものだな。濟まなかつた。

冬子。さうぢやないけれども、私！

圭一郎。とに角、音次郎は我々のために死んだやうなものだからな。最後まで石狩丸をまもつて闘つたんぢやないか。なあ冬子。(淋しく微笑ひながら)感謝こそすれ怨んでは濟ないんだ。

冬子。……………。(すゝり泣く)

圭一郎。それで俺も債權者に言つて來たよ。承知しました。自分の弟の爲た事ですから、私の承知不承知に關らず快く引き受けます。『その代り、今は何分此の様な始末ですから、保険金を取つたり、いづれ目鼻がついた上で、月々といふ風にでも徐々に返濟する事にしたい。』と言ふと、先方でも、本人が死んだ以上は無理も言へないから何とかしませう。といふのでさういふ譯にして來たんだ。

冬子。……………。

圭一郎。當分苦しいには違ひないが、さうやつて行けば如何にか切り抜けて行けると思ふ。家の事は萬

事俺が自信をもつて切り抜けて行くからお前は心配せん方が好いよ。

冬子。はい。(涙をふく)

圭一郎。(語を轉じて)讓吉の具合はどうだい。未だ起るといふ迄に行かないかね。

冬子。彼男あれも何だか氣が弱くなつたやうで、私が何か持つて行つてやる度に、『濟みません』つて涙をぼろ／＼こぼして起き上らうとするんですもの。

圭一郎。いや、ゆつくり寝せておいた方がよい。いづれ當時の様子も聞かうと思つて居るのだが。彼男なら男も立派だし、亦音次郎の片腕としてこれまで漕ぎつけて呉れたんだから、船の方も委せて心配ないし、腕も切れるから、萬事後の相談相手にもなつて貰はうとも思つて居る。お前だつて讓吉には小時から世話になつて居るんだし、氣心も知れて居るんだからねえ。(冬子の顔をうかゞふ)

冬子。えゝ。

圭一郎。飛んだ饒舌おしゃべりして腹が空いた。

冬子。兄さん。今すぐ御飯にしますから先にお湯に入つて頂戴。

圭一郎。さうか。ぢやすぐ御飯に願ふよ。何しろ一日中歩き廻つたんだからなあ。

二人左手に去る。間、讓吉仕事場の方から寢衣のまゝ出て來る。

讓吉。(感慨深さうに見廻し乍ら)何だか夢のやうな氣がするなあ。(歩きまはり乍ら卓子の所へ來る)うむ、卓子か。

(なつかし相になでまわし乍ら)あるな。よく音旦那と此の上で海圖を繰つたものだが。……………。今になればみんな思ひ出の種だ。(淋しく笑ふ)

此の時市職仕事場から荷をかついで出て來る。讓吉を見つけて

市藏。おや讓兄哥、もうそんなにして宜いんですかへ。

讓吉。なに寢床にばかりぢつとしても居られないからな。家の周圍めぐりを一回まはつて見たんだが此んな所へ來てしまつたんだ。

市藏。さうですかへ。

讓吉。仕事場で見つけたけれども仕事の邪魔をしてもと思つたんだ。

市藏。何しろ酷い目に遭ひましたねえ。

讓吉。本當に夢の様だ。

市藏。そんなに急にやられたんですかへ。

讓吉。……………。

市藏。(顔をうかゞふ)

讓吉。うむ。(暫く黙つて居る)お前にはいづれ話さうが、今はあんまり饒舌しゃべりたくないんだ。

市藏。(讓吉の顔を見ながら)さうですかへ。(黙る)何しろ旦那も力を落しておいでですよ。

讓吉。さうだらうな。

市藏。それに(邊りを見廻し聲をひくめ)先頃定つたお嬢さんの嫁入口から破談を申しこんで來たんです。

讓吉。お嬢さんの?さうか。

市藏。何しろお嬢さんも身体が弱くて、此頃は寢たり起きたりなんぞでせう。最初はこつちから待つて貰つて居たんですが、矢張身体からだの虚弱よわのにも困るといふんでせう。態よく斷つて來たんです。

讓吉。そして。お嬢さんは知つて居るのか。

市藏。旦那は矢張黙つて居るんでせう。旦那も嫌な事ばかり出來て、涙こそは見せなさらんがね。旦那の心中も氣の毒なんです。

讓吉。うむ。さうだらうな。(考へ込む)

市藏。ですがね、兄哥。旦那の口吻くちぶりではお嬢さんを兄哥に……………。

讓吉。何!

市藏。(にや／＼笑ひながら)なに、さうなれば宜いと思ふんで。

讓吉。馬鹿ア言へ。

市藏。さうだ。兄哥、まだ顔色が悪いですぜ。

讓吉。何だか頭が熱氣ねつて來た。また起きて悪いのかな。

市藏。いや寢て居た方が宜い。ぶりがへしちや詰らないから。

讓吉。さうしようかな。

市藏。さうなせえ。亦晩にでも雜話はなしに行くからな。俺はまだ爲る仕事もあるし。

讓吉。お前達にばかり仕事をさせて濟んな。その代り俺も身体が回復したらうんど働くから。

市藏。仕事場に入る。市藏の仕事場に入るのを見送つて、讓吉は力無げに椅子に身を落す。

問。冬子左手より急いで登場。讓吉を見て、

冬子。おや讓吉。此んな所に居たの?

讓吉。はあ。(立上らうとする)

冬子。私今粥を持つて行つたら見えないんだもの、何處へ行つたと思つてね。

讓吉。どうも濟みません。

冬子。もうそんなにして居て宜いの？

讓吉。未だ頭が本當でないんです。

冬子。どれ。(氣輕るさうに額に手を當てようとする)

讓吉。(あはて氣味に) いやお嬢さん。それ程でもないんです。(冬子の手を拂はうとして無意識に手を掴む。思はずぶる

ぶる身をふるはす) お嬢さん。

冬子。あらー(はつさとして取られた手を引かうとする) 讓吉。如何したの？

讓吉。(初めて我にかへり、自嘲的に苦笑をする) 大變瘦せましたねえ。

冬子。(はつさした様に) ええ。

讓吉。病氣の方は宜いんですか。

冬子。ずつと宜いんだけど。

讓吉。さうですか。

冬子。近頃音兄さんの事が悲しくて夜も眠られないんだもの。

讓吉。無理ありませんねえ。

冬子。え。

讓吉。しかし身体を大事になすつて下さい。

冬子。兄さんが、少時<sup>すこし</sup>たつたら登別へ行けと仰つしやるの。

讓吉。登別？結構ですね。

左手奥の方で圭一郎の冬子を呼ぶ聲がする。

冬子。おや兄さんが呼んで居るわ。ぢや直に寢た方が宜いのよ。

讓吉。ありがたう。

冬子左手に去る。次の室で圭一郎と出合つた様子。語聲だけ聞える。

讓吉。(力なげに椅子につく、物思ひに沈む)

間。圭一郎私服に着かへて出て来る。

圭一郎。讓吉。此處へ來て居たんだつてな。

讓吉。旦那ですか。(立たうとする)

圭一郎。いや、さうして居てかまはない。(椅子にかける) 私も何から話してよいかわからないが、

讓吉。……………

圭一郎。せめてお前だけでも助つて結構だつた。

讓吉。面目ありません。

圭一郎。色々詳細<sup>くわんじゆ</sup>い話も聞かうと思つて居たが、お前も昂奮して居た様子だから控へて居たのだが。

讓吉。はい。

圭一郎。また、後の事に就いてもお前に相談せねばならないなあ。

讓吉。はい。

圭一郎。萬事かうなつた以上不運とあきらめねばならぬとして、俺もこれからは一番、蒔直しをやる算りだ。それについて、お前に今までの音次郎に代つて船の方をやつて貰ひたいと思ふんだが。

讓吉。(感激を押へて) 私の様な者では如何と思ひますが。

圭一郎。いや、私からお願ひする。

讓吉。はい。

圭一郎。それについて、お前に聞いて貰いたい事もあるんだが、それはまた何れ後にしよう。(注意深く讓吉を見る)

讓吉。(はつと顔を上げようとし) はい。

圭一郎。(讓吉に目を注ぐ。巻煙草をすゝめ) どうた。讓吉。一本。

讓吉。いゝえ。私は戴きません。

圭一郎。さうか。

讓吉。……………。

圭一郎。時に話は別だが一應お前にも話しておく必要があると思ふんだがね。

讓吉。はい。

圭一郎。(強いて笑み乍ら) 俺も實際迂濶さ。今日初めて聞いて驚いた譯なんだがねえ。音次郎が、電氣に手を出したのがもとで此の家を抵當に入れて居ると言ふんだ。

讓吉。音旦那がですか。

圭一郎。うむ。

讓吉。その事に就て一應旦那のお耳に入れやうと思つて居たんですが。實は私も音旦那から承はつて居るんです。

圭一郎。なに！、音次郎がお前に話したのか。

讓吉。はい。

圭一郎。(續めて居た不快な感情が再びよみがへつて来る) 奇怪いぢやないか。此處の主人として今の今迄俺は少しも知らなかつたのだからなあ。

讓吉。はい。

圭一郎。それぢやお前たちがこつそりとたくらんで俺に祕密にして居たといふ譯なんだね。

讓吉。そういふ譯ぢやないんですが。

圭一郎。さうだらう。

讓吉。音旦那も沈黙つてこそ居られたが常にそれ許り苦にして居たやうです。

圭一郎。そりや苦にもするだらうよ。

讓吉。はい。

圭一郎。まあ宜いがね。お前も音次郎には心服して居た様だし、私もそれを丁度宜い事に思つて居たが、こんな事があると、俺も音次郎の兄として、亦お前の主人として面白くないからね。

讓吉。けれども音旦那はあんなに眞面目なんです。それだけ一人で苦しんで居たかわからないんです。さう言へば思ひ出しますが、丁度今度の船が出る前の晩でした。私を隠然呼んで、「讓吉。俺は今度の航行でうんとやる算りだ。兄貴に隠して置いた借金をどうしたつて埋めて置かなくちやならんから、異國へ上つたら無理をしても稼いで来る算りだ。讓吉、お前も頼む」と私の手を握つて言ふんです。私も「旦那の爲だ。命がけにやりませう」と言ふと。あの旦那がです。ぼろ／＼と涙を落して「俺も嬉しい。その代り……」(ぐつと言ひ語る)

圭一郎。如何したんだ。(はげしく見つめる)

讓吉。旦那！なにもかも言つて了ひますが、私はいつかお嬢さんを戴きたいと音旦那に願つた事があるんです。

圭一郎。冬子をか。

讓吉。はい。

圭一郎。そして音次郎はどう言つた。

讓吉。含んで置くから時期を待てと言ひました。

圭一郎。うむ。(不快さうに考へ込む)

讓吉。改めて旦那に願ひしますが、お嬢さんを戴く譯には行きませんか。

圭一郎。……………。(黙つて居る)

讓吉。私も一生旦那のために働き度いと思つて居るのですが。

圭一郎。うむ。

讓吉。いけないでせうか。

圭一郎。さう。(……………)何しろ問題が問題だからな。

讓吉。……………。(不安さうに圭一郎を見上ぐ)

圭一郎。音次郎が定めて居た所が、兄たる俺が全然知らないんぢやないか。

讓吉。さうですが。先刻旦那の……………。

圭一郎。俺がどうしたと言ふんだ。

讓吉。さうぢやなかつたんですか。

圭一郎。早合点して貰つちや困る。妹を呉れる問題と、音次郎の代りに残つて貰ふと言ふ問題とは話が違ふ。

讓吉。しかし旦那 (言ひ詰る)

圭一郎。……………。

讓吉。(何か言はうとしたが止る。涙を落して)旦那。悪うございました。

圭一郎。……………。

讓吉。だしぬけにこんな無理をお願いしてお腹立になつたかも知れませんが、如何か悪くおとり下さらぬ様にお願ひします。

圭一郎。なに。そんなにしなくとも宜いがね。私も只、俺は俺で冬子の長兄として此處の主人として相當の見識も持つて居る算りだから、何も弟の考へに束縛される必要はないと述べただけなんだ。此んな話はまた後にするとして、先づ遭難當時の模様でも聞こうぢやないか。前にもぼつり／＼聞いて見たが、要領を得ない点もあるし、昂奮させても宜くないと思つて止して居たんだが。

讓吉。はい。私も申し上げようと思つて居たんですが。(躊躇する突然) 旦那。

圭一郎。なんだ。(きよつとする)

讓吉。此の航海ぢや音旦那が全くどうかして居たんです。言ふ事が一時に胸につかへて居るやうなんですが。

圭一郎。俺にも腑に落ちない所があるんだが、兎も角詳細話して呉れないか。

讓吉。はい。(言想をまとめて居る様子)此の十五日に船が出てからです。五日許りは、波も静かでしたし、兎に角順調に航海をつづけて居たんです。

圭一郎。……………。(讓吉を見ながら煙草をふかす)

讓吉。所が、その時からして何んとかく音旦那の態度が平常と異つて居ました。

圭一郎。うむ。

讓吉。平常ならあれ位沈黙と底力で奴等を威服する音旦那が、今度に限つて氣をくさくさせて船の奴等を怒鳴りつけたり、一人でぶつ／＼言ひ乍ら甲板を歩いたり妙に日取りを急いだりするんでせう。時々亦冗談のやうに、「つく／＼こんな商賣がいやになつた」などとも言つて居られました……。何ですか旦那。こんな風に音旦那が海業に嫌氣をさしなすつたにいつちや、實は私にも多少心當りがあるんです。

圭一郎。うむ。(讓吉を見つめる)

讓吉。(圭一郎の顔をうかがひ乍ら)石狩の電氣に音旦那が金を注ぎこんだつてんですが、あいつは皆にうまい事を言はれてやつたに違ひ無いが、その中に、音旦那の友達の電氣技師の妹とかいふんです。勿論音旦那もその女を急に如何すると云ふ氣もなかつたんでせうが、とに角その女を想つて居た事は事實らしいんです。

圭一郎。……………。

讓吉。所が音旦那は海に出る。歸つて見たら電氣は中途でつぶれて失つて居る。女は、もう嫁入つて居る。次の航海に出た時そんな話を一寸音旦那の口から聞いたんですが、その時「船員なんて因業なも

んさ」と戲言らしく言つて淋しく苦笑する音次郎を見ました。

圭一郎。うむ。

讓吉。それでも或る晩なんぞは、波が静で、月が昇つて來た時私と共に甲板を歩いて居ましたが、凝乎と海上を見つめ乍ら、「海も満更悪くはないな」といつて笑はれた事もあるんです。で、船が利尻島の西を通る頃から段々荒模様に變つて來たが、十六日の夕方には無事宗谷の港へ入りました。其處で荷を積み込んで浪の靜まるのを待ちましたが、風が出る、波は高い、而も荒海と來て居るので仕方なしに私と數人が船に残り、他は上陸して宿につきました。

圭一郎。うむ。

讓吉。翌日です。浪は相變らず高い。私が船から上つて宿へ行つて見ると、音旦那は黙つて海の方を見ながら考へ込んで居るんです。私を見ると直ぐ、「讓吉今日はどうだ」と聞くんです、「とても駄目です。浪が荒いから」と言ふと、「當分見込みは無いか」といふんです。「兎に角明日になつて見なくちゃ」と答へて、船の連中の部屋へ行つて見ると、皆集まつて何かや／＼言ひ合つて居る。聞いて見ると、何でも前の晩に遊びに出た奴が遅く歸へつて來たとかいふんで音旦那が立腹して殴りつけたと言ふんです。

圭一郎。……………。

讓吉。翌日になつても波は靜らない。音旦那は益々えらく／＼して來る。皆んなの奴等は只ごろ／＼寝ころんで居る。何にせえ廿五日の定期市前にアレキサンドロフスクに船を着けねばならないのですから、音旦那の氣をもむのも無理はありません。けれども廿五日といへばまだ間もあるからと私も氣を安め



て居たが、次の日になつても海はまだ荒狂つて居るのです。その晩。寒い晩でした。私が船倉でうつら／＼して居ると宿から迎ひの者なんです。用事を其奴に聞いて見ても一向要領を得ない。何事だと思つて宿へ行つて見ると、何事もなく唯、音旦那が未だ寝ないで私を待つて居るんです。

圭一郎。 うむ。

讓吉。 「讓吉。明日はどうしても出帆しよう」音旦那は出しぬけにかう言ふんです。兎も角明日の様子を見てからと言つて私は船へ歸りました。翌日海はやつぱり荒い。幸ひ順風にはなつたけれども、途中が恐ろしくて船を出せそうにも思へません。宿へ行つて見ると音旦那が奴等を怒鳴りつけて居るんです。「貴様達は夫でいゝだらうが此方の財政が許さん」とがみがみ言つて居るのです。奴等は奴等で、此處を離れたら最後最早寄港する所がないんだから、此んな大浪に出て堪るものかと言ふ。旦那は頑としてきかない。仕方なしに私は復海岸へ出て見たが波は相變らず高い。しかし十分注意したなら船を出せぬ事もなからうと思ひました。

圭一郎。 うむ。

讓吉。 色々仕度もあつて午後四時頃宗谷を出ました。幸ひ順風でもあり、潮流の具合も宜い。思つたより都合よく船を走らす事が出来ました。所が、日が暮れる頃一度静まりかゝつた大風が、夜暗と共に恐しい渦を卷いて再び船を襲ふて來ました。暗さは暗し波は高し如何する事も出来ません。しかし風浪の中にも夜の一時頃、熊取岬を通り過ぎて居たと思ひました。

圭一郎。 ……………。

讓吉。 それからまた樺太島の沖七哩を陸に平行に高波を冒して進みました。その頃から三百噸の石狩丸

はまるで木片の様です。甲板は海水をかぶつて飛沫が船艙に迄飛びこむんです。皆んなは暗黒の甲板上を夢中になつて馳せまはりました。

圭一郎。 うむ。

讓吉。 その頃から奴等が文句を出しはじめたんです。「だから言はんこつちやない」仕舞には船を返せと迄言ひ出すんです。私が旦那に如何しませうと言ふと、旦那は旦那で意地になつた様に「かまはない」と怒鳴りました。

圭一郎。 うむ。

讓吉。 所が今迄海上七哩の所を進んで居ると思つたのが、何時の間にか波浪のために三哩の所へ押し流されて居るんです。それを知つた時には思はずつとしました。その邊には暗礁が多いんです。奴等はおもうやけ糞になつて何もせずに騒いで居るんです。旦那がすか／＼とそこへ行きました。何か言ひ合つて居たかと思ふと、旦那はいきなり一人をその場になぐり倒したんです。そ奴が甲板にぶつ倒れて呻つて居る。その時だ。急にどつと來た大浪が危く皆の足をさらはうとして艦に積んであつた荷物半分程どつとさらつて行つて了ひました。

圭一郎。 うむ。(煙草を止めて讓吉を見つめる)

讓吉。 旦那は呻り乍らそれを見て居たが、奴等に此方へ荷を運べと言ひつけたんです。奴等は何だかんだと言つて少しもきかない。そのうちに二度三度の大浪が亦どつと襲つて残りの荷を大方持つて行つて了ひました。その時。今迄ぶつたはれて居た奴が突然、どつと來る浪をかぶりながら半ば身体を起すや否や恐しい形相をして、「やつつけてしまへ」と怒鳴つたんです。「さうだ」「こんな譯のわからぬ奴

とは思はなかつた」と、大勢がいきなり旦那を取り圍んだんです。

圭一郎。 うゝむ。

讓吉。 私は吃驚して旦那の所へ走つて行きました。私が旦那の傍へ行くや旦那は二人ばかり殴り倒して私につきあたり乍ら、「もう此んなもの、如何なつたつて、關ふもんか」と怒鳴りました。旦那はさう言ふと、よろめく様に機關室の方へ走つて行きました。木つ葉の様にゆれる甲板の上を風を切つてつづいて私が機關室に達した時、異様な音響と共に中からは火焰が吹き出して居るのです。力まかせに戸を開けようとしたが開かない。「旦那。旦那」と如何に呼んでも中では只物凄い火焰の音だけです。火煙は盛に吹き出す。濛々たる煙のために退けられて復とつて反すが戸が開かない。その中に火煙の爲に到頭甲板の上迄押し出されてしまつたのです。(圭一郎の顔をうかがふ)

圭一郎。(さつき顔が青ざめる)

讓吉。 風は強し、火は見る／＼中に擴りました。船火事と見てとつた奴等は、小艇を下して居ました。私は氣が残つて今一邊死物狂ひに甲板を馳せめぐり、もとの所へ來ると皆はもう乗うつて居る。下のぞくと眞暗な中に大勢で一生懸命に怒鳴つて居る様子。私が綱につかまつた時だ。物凄い音響が激浪の音と共に船と艇との間に起つたかと思ふと、もう艇は見えない。只黒い波が魔物の様にゆらいで居るだけなんです。私は夢中になつて何時の間にか握つて居た板片をかくへるや否や海中にとび込みました。只夢中になつて泳ぎました。何んだかば一つと赤い火を見たやうだがそれからどうなつたのか知りません。翌日正氣を失つて近所の海岸へ打ち上げられて居たのです。(圭一郎見る間に顔が蒼ざめて來る。極度の昂奮苦悶に堪えて居る様子)旦那。

圭一郎。 うむ。

讓吉。 ですから！(唇をふるはせ乍ら)船は音旦那が火をつけたんです。

圭一郎。 さうか。(頭を抱へ乍ら頭髮をかきむしる。やがて圭一郎の抑ゆる苦悶昂奮は誰にさもつかぬ嘲蔑の笑にかはる)解つた。もう何もお前に尋ねる必要もない。

讓吉。(解せぬ様に見上げて)はい。

圭一郎。(不氣嫌さうに)お前、彼方<sup>あっち</sup>へ行つて居て呉れないか。俺は何だか氣持ちが悪いから。

讓吉。 ですが旦那。

圭一郎。(嚙んで吐くやうに)なんだ。

讓吉。 さうなると第一保險の方が危いんです。

圭一郎。 だが保險がどうだといふんだ。

讓吉。 旦那。如何つて！船の持主が自分で焼いた船には、保險會社が文句を言ふに定つて居るでせう。(物につきあたる如く)おい。讓吉。俺が保險金をとれなくつたら如何<sup>どう</sup>なると思つて居るんだ。

讓吉。 旦那！悪く取つて貰つちや困りますが今此際保險金がふいになつたら旦那も困るだらうと思ひます。

圭一郎。 俺がそんな事で困るかどうか、わからないよ。

讓吉。 ですが旦那。どうせ此の事を知つて居るのは此の二人切ぢやありませんか。

圭一郎。 おい。讓吉(二人のけはしい目が合ふ)遂々<sup>さう</sup>本音を吐いたな。

讓吉。(顔色を變じて暫し圭一郎をみつめる)旦那(強ひて氣を靜めながら)旦那は私の言ふ事を一々變に取つて居られ

るやうぢやないですか。

圭一郎。 何んだか急に邊が暗くなつたやうな氣がするんだ。不氣味な黒煙の渦流だ。音次郎が芥のやうに焼いた石狩丸の煙だ。(侮蔑の笑を浮べ乍ら) お互に、その中で、無關心では居られまい。ともかく、はつきり言つて置くが。お前には冬子をやれないからね。

讓吉。(思はず前によるめき乍ら圭一郎を見上げる) あゝ。旦那! お願ひします。死んでも思ひ切れません。

圭一郎。 俺は今まで皆んなに見くびられて居たのが悔しんだ。音次郎までが全然俺を踏みつけにした事をやつて居るんぢやないか。誰に斷つて冬子をお前にやる約束をしたんだ。如何してまた俺が今まで粒々辛苦して保持して來た所有船を芥の如に焼いてしまつたのだ。

讓吉。 旦那お願ひです。お嬢さんを下さい。

圭一郎。 やらないと言つたらお前はどうする積りだ!

讓吉。 それは無理です。私も長い間當家にお世話になつて居ります。亦旦那の爲にも骨身を削つて働いて來た算りです。少しは私の心を知つて戴いてもよいと思ひます。

圭一郎。 だめだ!

讓吉。 だめなんですか。

圭一郎。 お前も案外思切りの悪い男だね。

讓吉。 ぢや旦那。どうして駄目なんです。

圭一郎。 如何してつて第一お前は雇人の身分ぢやないか。それに冬子の嫁先も定つて居る。

讓吉。 旦那!

圭一郎。 何だ。

讓吉。 お嬢さんの縁談は破れて居るぢやありませんか。

圭一郎。 なに! 何處で聞いた!?

讓吉。 何處つて。さうぢやありませんか?

圭一郎。 さうか。(默る) けれども俺は何もそれについてお前の助力を願ひはしない。俺は俺でどこまでも冬子の爲に良縁を求め得るだけの自信がある。こんなに皆んなにみくびられる程、そんなに俺は弱い男ではない積りだ。

讓吉。 旦那。如何しても駄目なんですか。

圭一郎。 くどい!

讓吉。 あゝ。(絶望した様にうなだれる、息苦しい間。やがて讓吉涙をぬぐふ) 旦那。もう一邊お願ひします。

圭一郎。 (自分の感情に苦しむ態) 不可ない。

讓吉。(やゝ強迫を雜へる様に立ち上る) それでは暇を下さいますか。

圭一郎。 出て行くといふのか。

讓吉。 あゝ俺は自分の主人に弓を引きたくはない。(再び椅子に身を投げる) 旦那。お願ひです。

圭一郎。 俺はお前の行動を束縛しない。出て行きたいなら出て行くが、俺は誰にも頼らない。小さくとも斷乎として自分の進路を切り開いて見せる。

讓吉。 旦那。思ひなほして戴けないでせうか。

圭一郎。 お前は何時迄私を侮辱する氣だ。

讓吉。侮辱？

圭一郎。侮辱だ。雇人の分才で弱点につけこみ主人の妹を強迫するなんて侮辱でなくて何だ。

讓吉。侮辱！(讓吉は眞蒼になつて立上る。苦悶より絶望、次いで憤激へ)口吻を以て人を此んな破目に落ち入らせて、一体どちらが侮辱ですか。

圭一郎。血迷つた事は言つて貰ふまい。口吻々々と一体俺がいつどんな口吻を洩した。

讓吉。どんな口吻を洩したか後で思ひ知る時が来るでせう。

圭一郎。何んだと。(憤然立ち上る)

讓吉。あゝ。(何かまだ言はうとして、躊躇となつたが踏みさぐり)糞ツ！

讓吉血相をかへて仕事場の方へ去る。圭一郎茫然として居たが後を追はうとする。苦悶の状。やがて力も失せた様に再び椅子に身を投ずる。

圭一郎。あゝ。(間。狂夢からさめた様に)俺はどうく讓吉まで失つて了つた。俺はどうしてあんな事を言ふ氣になつたんだ。俺はそんなに弱い男なのか。

間。正太仕事場より急で出て来る。

正太。旦那。どうしたかね。

圭一郎。おい、讓吉はどうしたか知らないか。

正太。何だか知らねいが、馬鹿に眞蒼な顔をして來ただから「兄哥どうしたぞね」つてつたら恐い顔をして「水を持つて來い」つて言ふだ。持つて行くつちうと、ぐつと吞んでしまつてコツアを地面へ叩きつけろと言ふだ。「兄哥、ぼつこれるぢやねえか」つて言ふと「如何せ何もかもぶつこはれるんだ」と

言つて出て行つて了つたんだねえ。

圭一郎。さうか。正太！あつちへ行つて、呉れ。

正太。さうだかね。

正太去る。冬子左手より出て来る。

冬子。兄さん。

圭一郎。冬子か。

冬子。ええ。

圭一郎。冬子。お前泣いて居たね。

冬子。いゝえ。

圭一郎。さうか。今石狩丸の遭難の様子を聞いたんだが、思はず。(苦笑にまぎらはす)

冬子。さう。(落ちついて黙つて居る)

圭一郎。身体はどうだい。これからは寒くなる許りだから氣をつけないといけないね。

冬子。ですけれども私！(多情な眼で見上る)

圭一郎。(思はず)冬子！(椅子より立ち上る)

冬子。兄さん。(すがりつく)

圭一郎。(妹を擁して)兄一人妹一人なんだよ。(さやく)

冬子。(わつさ泣き伏す)兄さん。私をいつまでも傍へ置いて下さい。置いて下さい、ねい兄さん。私はどうせ病身なんですから。

圭一郎。冬子。みんな聞いて居たんだね。  
冬子。(泣き乍ら)はい。

圭一郎。うむ。さうか。(淋しく笑ひながら)おい冬子泣くな。なに、泣かなくつてもいいんだ。成程俺の力の不足だった故もあらうよ。しかし俺は音次郎の態度が悔しいんだ。俺はその爲め無性に腹が立つて譲吉にまであんな事を言つて了つたんだ。(しばし苦悶に黙る)俺は今淋しい。裏切られた淋しさだ。しかし孤獨の中から力が湧き出るよ。ねえ冬子。俺は飽迄忠實なお前の保護者だよ。

冬子。(嗚咽しながら)兄さん。音兄さんを許して上げて下さい。

圭一郎。……………。

冬子。ねえ兄さん。(身をもたえる)

圭一郎。冬子。俺は此の際苦しいよ。然し、うちの者を考へたら苦しいからつて投げ、出せるか? 成程

俺は音次郎より弱かつたかも知れない。馬鹿だつたかも知れない。けれ共俺はやるだけは必ずやり貫して見せる。俺は自分の所有船に火をつけはしないからな。(誰をあざけるでもない空虚な笑)

冬子。あゝ兄さんは未だ音兄さんを……………。

圭一郎じつと腕ぐむ。冬子の歎歎の中に。

…………… 靜かに暮……………

一三二、五

## 部報及編輯後記

### 音楽部報

筆と口とに縁の薄い音楽部では今年中に一回も部報を出さなかつた。これで今學年も御別れだから北辰會雜誌の餘白を貸してもらつたことにした。迷惑だらうから「アレクロ」の早さでやつて行かう。

昨年卒業生を見送つた吾々殘黨は器樂では牛と歌と曾と原の僅か四人、器樂の打撃が最もひどかつた。もう今年は音楽會は到底出来ないだらうと思つた位だつたが窮すれば鼠も何さかやらで、春期音楽會はそれ程貧弱すぎるまいふそしりも受けずに済んだ、——巧拙は別として——

今年は吾が四高音樂部に於て特に大筆すべき事がある、それは吾等の首唱によつて醫大と高工の音楽部を糾合して「金澤學生音楽聯盟」といふ嚴しい名前の團體が出来たといふことだ。丁度一學期の試験が済むと此の話が起つた、そして第二學期の始まる頃には稍々成案が成つてゐた。こんな大きなものになら

うことは實際意外な程同志が集つてきた。好きな同志が集つたんだからその勢ひや當るべからず遂に演奏旅行を數回にわたつてやる事になった。長くなるから委しい事は省くが、最初福井に行つてあの大きな加賀屋座でやつたところが丁度山田耕作がやつた一週間後なので恐しく入場者が少くてテツカイ自腹を切つたので皆がゴッ困つた様だつたが、おまけに吾々四高生は校長さんからひどい御眼玉を頂戴した。高等學校の生徒は如何なる場合と雖も金に關係した音楽會に出てはならない規則があるのださうだ。もう済んだ事だから知らずに犯した罪と思つてみんなの前で公表する。面白かつたのはそれからなんだが餘り「カンガシテ」にもやれないからこの事はこの位によつて置く。その前に一寸一言、云つて置きたいのは、この音楽聯盟によつて吾々は金澤市民の音楽熱をどれだけ刺戟したか知れないといふ事と、音楽を媒介者として醫大をはじめ高工や藥事などの人々の間にどれだけ親密の度を加へたか測り知れないといふことだ。

昨年の三學期にはバイオリンをやめてマンドリンだけでやつたが今年は矢張りみんなやる

事にした。部員大部分は三年なのと勉強を餘儀なくされる連中が多い關係上、全く練習が足りない爲めに餘りいゝ成績でもなかつたが兎に角無事音楽會を済ましたときは嬉しかつた。今年は新しい試みとして「ピアノ、トリオ」をやつてみた、中々の冒險だつたがみんなよく頑張つて大した失敗もしなかつたことは特筆に値する。發想記號やテクニクさへ碌に知らないくせに何のかんのと解つた風する人の多い中に兎に角かうして眞面目な態度でみんながよく頑張つたのは要するに青年の濃渾たる勇氣があつたからだと思ふ。

牛やちんの頑張り方は部でも有名だが今度には名を金澤に擧げたといふものだ、松ちゃんの前で歌公のマンドリンだつて何といつても金澤の學生中では四高が一番技倆の上に於ても實際の上に於ても抑へてゐるのは事實だ。兎に角吾々が出たあその部の諸君はさても並大抵な苦心でない事は御察しする、けれども昨年の吾々のことを考へたら大した不平もこぼされない筈だ。奮發次第によつても今年以上——今年だつて隆盛ではないんだが

ものになる事は疑ない。不平をいふならあの天井の低い反響の悪い講堂だ。元氣のいゝ虎公や、頑張りの「コーナン」君や「シヨ

「ソグデス」君や、マネジャーとしての「ダニ」君やは大いに奮發して吾が部の爲めに講堂の改築運動でもやつたらうだ。音楽會の時あの汚い幕の後の狭い一隅に控所をガラガラ歩く足跡の音を聞きながらセロの調子を合せてゐた時僕は本當に涙が流れた。……

昨年の事を又云ふ様だが昨年は本當に逸物が多かつたが、今年の部の卒業生だつて相當に揃つてゐる様だ、だが今年は、未だこれから未來のある逸物が随分残つてゐるから來年度の活躍は見物だらう。今の一年生の諸君に於て殊に然りである。來年は諸君しつかり頼んだ。——(二月十四日原生)

#### プログラム

#### 第一學期春季北辰會演奏會 至誠堂

五月二十六日

- 一、マンドリン合奏 部員  
エンリヘッタ……ハントマニ作
- 二、四重唱 部員  
快活なる狩人……シユーマン作
- 三、バイオリン四重奏 石塚、曾、歌橋、原  
春の歌……シユーマン作
- 四、獨唱 浩  
セアズ、ロング、ロング、トレール
- 五、マンドリン二重奏 歌橋、石塚、谷  
ドロアー……フエツツテイ作

#### 六、マンドリン合奏

部員

ナボリの思ひ出……ガルガノ作

#### 七、バイオリン、オーケストラ

部員

ホフマンの船唄……ロバート作

#### 八、マンドリン合奏

部員

ガルレアン(ガボット)……

#### 九、獨唱

竹内

一、月光……サンサーン

#### 二、子守歌

田中銀之輔

#### 十、バイオリン四重奏

石塚、曾、歌橋、原

カオルテツト十七番……ハイドン作

#### 十一、三重唱

竹内、大澤、浩

シ、リアの民謡

#### 十二、マンドリン四重奏

歌橋、白木、石塚、谷

村の祭……ビンセンツオ、ピリ作

#### 十三、バイオリンオーケストラ

部員

ミヅリ河を越えて……ボン作

#### 第三學期北辰會音樂會 至誠堂

二月六日

- 一、マンドリン合奏 部員  
ダーメンワール(ホルカ)……アントニオツテイ
- 二、コーラス 會員  
探梅
- 三、マンドリン四重奏 歌橋、近藤、谷、石塚  
スペイン風組曲
- 四、セロ獨奏 原 太平  
エレザイ

#### 五、バイオリン、オーケストラ

部員

ドーター、オプ、ラア……ベネット作

#### 六、マンドリン合奏

部員

森の道達……アレシオス作

#### 七、コーラス

部員

早起……ウエーベン作

#### 八、マンドリン獨奏

歌橋 均也

マヅルカ、コンチエルト

#### 九、テナー獨唱

竹内

セレナーデ……トステイ作

#### 十、バイオリン、オーケストラ

部員

高等學校生活……スーザ作

#### 編輯について

北辰會雜誌もさうさう百號に近づいてきた。今號は丁度第九十九號である。自分は昨年一學期この雜誌の編輯を目論む時、この九十九號を出したと思つた、さういふより出さればならんさまで思つた。しかるに、さう云ふ理由であるが知らないが(その當時、その理由を訊いて見たが解らなかつた、さういふ積りで彼らが頼んだか分らなかつた、それがこの三學期になつてポート部の金を寄附するに至つて益々分らなくなつて、むしろ輕い反感さへいづくやうになつた)雜誌の發行を二度にしてくれといつてきた。浦井先生からも、其のやうな話を承つた。その時私は精々金を幾分か残すこととして三度出して見たいとお話してきた。——さうして自分は、二學期を約七十頁位にして三學期を百二十三十頁位にしようといふ論議なのであつた。相不變い、原稿を余り集まらなかつた。さうして先生からいただいた原稿を合せて七十頁にしようと思つてゐた。その時早田博士からの原稿をうけとつた。このため一學期の結果は百頁となつて了つた。

二學期になつた。締切がすんだけれど、あまり原稿が集まらなかつた。あまで出して見たいといふ人を二三聞いたが、色々の理由と共に金を少し残さなければならぬといふ理由が、あの短歌號を作らしめるに至つた。殊に部報が澤山集まると思つたからであつた。かくして二學期を六十頁位にして三學期を厚くしようと思つたのである。

三學期になつた。期間が割合短かつたにも拘らず締切までに、これまでにない程澤山原稿が集つて來た。がい、原稿は余りなかつたので淋しく思つた。出して見るさういふやうな思はせ振りをして出して見たいものがあつた。言ふまでもなく、作品は製造品ではない。殊に學校の雜誌となる、作品の性質に制限がある。そして寄稿をこちらから頼むのではない。この三つのことが、原稿を少くして了つた。それで、今學期は何も書かうと思はなかつた自分まで、書いて見るやうになつて了つた。——そして自分は「病める牝鷄」と「ある情話」を書き出した。

この作を書く前にも印刷の期間がせまつてきたので九十頁二百三十拾圓の豫定で、出した原稿だけを印刷屋へ渡してしまつた。そして自分が自分のものをかいてゐる中に、原稿の枚数が長くなつて了つた。それで「病め

る牝鷄の9.10齣を、もつとお品の心持でかなければならなかつたけれど、略して了つた。さうするよりか「ある情話」の翻譯を割愛しようと思つては見たが、さうしても割愛することが出来なかつたのである。

この三學期も浦井先生から、金を残してくれと話されたので、私もその積りでゐました。がさうも豫想して見ると、百頁を越え、總額は二百六十圓以上になるやうであるので、お約束に責任をもちたいけれど、上のやうな事情ですから、赦してください。

今號は裝幀方面は出来るだけ感がいゝものにした。紙は余り白ぼいのは目に悪いと思つたので、少しよくして見た。繪はこれまで實によく苦情がもたらされた。でコロタイプにしてみた。結果はさうが分らない。繪の方は表現派に關するものをあげて見た。紹介ではなくして集めて見て、表現派の心持を出して見たと思つたからである。割合に感じやすい解り易いものを集めた。Hoflinや Picassoが「Marcel」一枚出したが金が、かゝるのでやめた。でPechsteinの「難漕」を出した。舞臺面はエルンスト、トラアのMiser-Menschの一を出した。これは近いうち伊藤先生がお

譯しになる筈です。活動寫眞の方は、よく御存じの「カリガリ博士の長持」の一場面です。

(内方記)

う。お互にまた會ふこともあるだらう。さあお別れだ。身体を大事にしてくれ給へ。左様なら。(二月二十七日内方記)

## 再 び

校正を全部終るゝ、再び頁が増したに驚いた。百十二頁にもなつて、豫算高をすっかり費つてふやうになつてきた。私はまつたくうんざりして了つた。原稿用紙として九十頁そこらの豫想であつたのであつたが、戯曲が割にさいふよりも意外に澤山の頁を使つて了つた。それで紙質を悪くしようと思つたけれど、もう本刷が、大分済んだので、どうにもしようがなくなつた。私も他部との均衡上の徳義は重んじたい。がどうもやり方がなくなつた。恕していただきたい。

長らくこの雑誌と縁をつゞけてきた。が今度からはもうおしまひだ。永遠のお別れとなつてきた。その間いろ／＼の出来事もあつた。思ひ出して見るさ暇があつくなつてくる。殊にこの一年色々お世話になつた諸先生にお禮を云つておきます。

お互に輕々しいことをしないやうに努めよ

### 意注

- 原稿は四百字又は二百字用紙に認むべし
- 作品の種類は作者の自由たるべし
- 締切期日は遵守すべし

大正十三年二月二十五日印刷納本  
大正十三年三月三日發行

第九十九號

### 【すら賣に市】

編輯兼發行者 石 動 治 吉  
石川縣金澤市下本多町十一番地  
印刷者 大 村 重 松  
石川縣金澤市高岡町九十番地  
印刷所 明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

